

Hino vision 50 : 水都日野を目指して

ISHIWATA, Yushi / 石渡, 雄士 / NAGANO, Hiroko / 長野, 浩子

(出版者 / Publisher)

法政大学エコ地域デザイン研究所

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

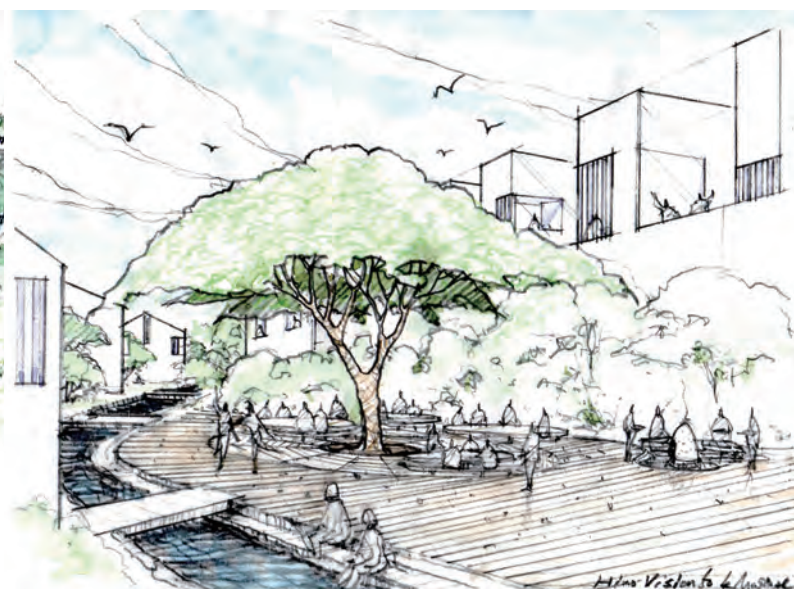
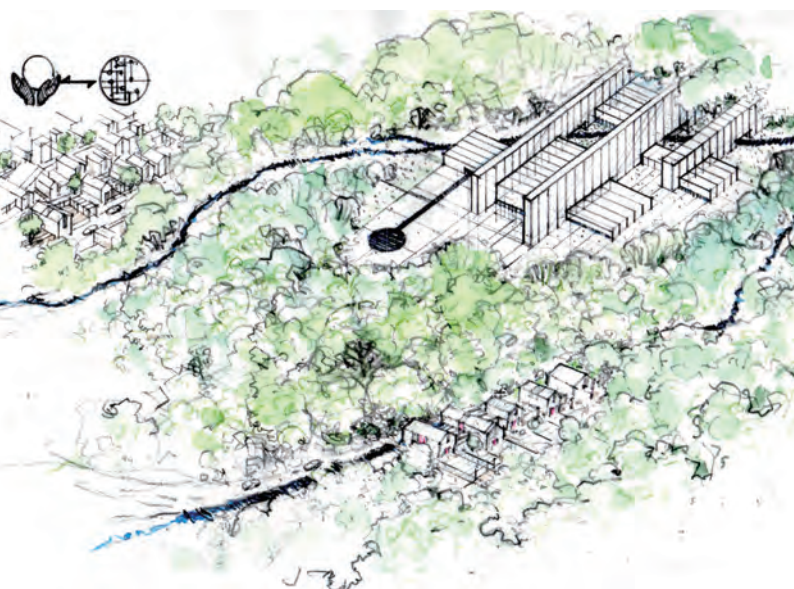
2014-01



Hino Vision 50

水都日野を目指して

長野浩子＋石渡雄士



表紙

上：氏家健太郎 画

中（左）、（右）：永瀬克己 画

下：氏家健太郎 画

Hino Vision 50

法政大学エコ地域デザイン研究所

このグランドデザイン案は市長と市民の意見交換会、及び市政経営懇談会の懇談会の意見も反映し、
法政大学エコ地域デザイン研究所のメンバーで議論して作成されました。

はじめに

私達、法政大学エコ地域デザイン研究所が「水の郷」と言われる日野市と出会い、この地域の成り立ちを歴史とエコロジーの立場から調査・研究すると同時に、その環境を活かした地域づくりのお手伝いを開始して、はや8年が経つ。この間、幸いにも市民の皆さん、行政の方々との深い交流が生まれ、信頼のもと、様々な活動が展開されてきた。法政大学と日野市が協定を締結し、「水の郷日野地域再生事業」に一緒に取り組み、その果実として『水の郷 日野 農ある風景の価値とその継承』（鹿島出版会、2010年）を刊行できた。またそれが切掛けとなり、市民の方々が参加する「日野塾」が誕生。その場から、水を活かした地域づくりに関する様々な動きが生まれている。

そうした実績を評価いただき、日野市の「50年後のビジョンづくり」プロジェクトを推進するにあたって、それをビジュアルな表現でまとめ上げるという難しい仕事を依頼された。どこでも可能な大型開発プロジェクトを誘致するとか、地域を大改造するといった従来の発想でなく、その地域の歴史と自然の資産を活かし、場所の個性を引き出し、市民と一緒に育て上げる新たな質の高い再生、開発が求められるのであり、時間をかけたリサーチの蓄積なしには取り組めない課題なのである。まさにエコ研がこだわり、切り拓いてきた実践的研究の新たな領域であり、私達にとっては、実にやり甲斐のある仕事だった。

青山佾明治大学教授、細野助博中央大学教授とともに私自身も参加した馬場弘融市長（当時）を囲む「50年ビジョンプロジェクト懇談会」、そして多様な市民グループが参加した何回にもわたる意見交換会などの成果を素材、下敷きにし、50年ビジョンづくりにチャレンジしたのである。

一方で、私達の法政グループは、3年前より、科学研究費補助金基盤（S）「水都に関する歴史と環境の視点からの比較研究」（代表者：陣内秀信）の採択を受け、「水都学」の確立をめざし、国際的な視点から、水都としての東京の特徴を研究している。その比較研究にとって、日野の役割が一層大きくなっている。東京の下町・都心が江戸から続く水都であったばかりか、実は山の手、そして武蔵野がまた多様な水の資産をもつ水都であり、水の地域であることが認識できてきた。さらには、多摩地域の田園に育まれた「水の郷」日野もまた、今や独特の価値をもつ「水都」として捉えられる。前述の「50年ビジョンプロジェクト懇談会」でも、日野をより個性づけ、今後の地域づくりにとっても強い方向づけをもたらす意味で、「水都」という言葉がキーワードとして浮上したのである。市が目指している「にぎわいの場」「いこいの場」「くらしとものづくり」「学びとあそび」の4大柱のどれにも、日野では「水都」が深く関係してくる。都市の環境、空間、風景、暮らし、人間関係、経済など、どの面をとっても、今後の日野を構想するには、「水都」というイメージがふさわしい。私達の科研による「水都学」が目指すものは、まさにそこにある。都市・地域社会の深い所から、水のもつ役割、意味を再び掘り起こし、過去と現在、未来を繋いで、その場所にふさわしい豊かな地域社会を形成する文化と経済の戦略を構想することである。本報告書「Hino Vision 50-水都日野を目指して」がそうした役割の一端を担えれば幸いである。

法政大学エコ地域デザイン研究所

所長 陣内秀信

目次

はじめに	2
目次	3
1. プロジェクトの目的	4
2. 50年ビジョンを作成するにあたり、これまでのまちづくりをふりかえる	5
3. プロジェクトの進め方と位置付け	6
4. キーワード	9
5. 50年ビジョン HINOMANDALAー 日野曼荼羅	10
5-1. 歴史の深層 Hino Layer	12
5-2. A層ー大地・水の形態	13
5-3. B層ー緑・農	16
5-4. C層ー歴史	18
5-5. D層ーまつり・観光	22
5-6. E層ー施設	24
5-7. F層ー工業	25
5-8. G層ー研究・教育	27
5-9. H層ー将来像	27
○日野俯瞰図	28
○ものづくりの郷～テクノタウンから工房まで	30
○街道のまち日野	32
○大地と水の恵み～住み続けられる水の郷～農地を流れる水路沿い	35
○地域ごとの個性的なコミュニティ～住宅地を流れる水路沿い	37
○日野を見渡す丘陵地での生活	38
○日野の新産業	40
○街中のショーウインドウ路地	41
○日野の祭り、日野の活気	42
○水と緑を繋ぐ、水辺を彩る植栽	43
図版出典・メンバー	45
あとがき	46

1. プロジェクトの目的

日野にはその自然豊かな環境を求めて移り住む人が多い。市民意識調査でも日野市の良いところとして多くの人が水や緑、農ある風景があることを挙げ、2010年の調査によると88%の人が日野は住みやすいと答え、86%が住み続けたいと答えている。日野市の住みやすさは誘致された企業の恩恵もある。その企業を誘致する決断をしたのは昭和の初め、まちの運営を担っていた人たちである。多摩平団地も「日野町100年の体計の基盤」（日野町広報昭和32年3月）として位置付け受け入れた。工場、団地の建設は国の政策でもあり、受け入れざるを得ない面もあっただろうが、日野の財政を支え、雇用の場を創出し、無秩序な開発を防いだのも事実だ。だが大規模な開発により土地を追われたり、農業を諦めたりなどそれまでの平穏な暮らしが脅かされ、また誘致した企業による公害など負の側面があったことも忘れてはならない。日野市誕生から50年、高度経済成長にともなう様々な課題に追われながらも、ひと段落したのも束の間、今は工場撤退、高齢化、税収減などへの対処が求められる時代となった。

本プロジェクトは、日野市制50年の節目に、これからの50年後を見据え、『進むべきまちの将来像』を描くことを目的にスタートした。それは50年前の先人達が日野の将来を見据え大きな決断をしてきたことで、今の日野があるように、大工場の撤退や高齢化など迫りくる様々な課題を抱える現在、50年後、あるいは100年後を見据えた将来像を描き、市全体で共有し、これからのまちづくりに活かしていこうということである。

これからの50年を考える上で明らかなことは、高齢化や人口減少に伴う社会保障費の増大や労働人口の減少、温暖化にともなう環境変化が自然災害など命や生活を脅かす事態をもたらす、グローバル化による世界との繋がりがさらに複雑・深化、石油など化石燃料が枯渇に近づく、そして大きな地震が発生する可能性も高いことなどがある。気候変動は自然災害だけでなく農作物の生産に影響し、食糧危機をもたらすかもしれない。グローバル化は例えば地球の裏側の経済的問題がすぐさま世界中に影響し、家計をも脅かすかもしれない。ほとんどは豊かさを求め進めてきた科学技術や産業が、様々なリスクをもたらす、ますます予測不可能で制御不可能な事態を招く（*1）。既に避けがたい事態になっているが、50年後、100年後を見据え、リスクを減らすためにもその根本原因を見直す必要がある。



図1. 日野パノラマ

50年後が誰かの何かの犠牲のもとにある豊かさではなく、リスクの少ない、そして市民社会が成熟し、今より公正な社会システムになっていて欲しい。50年ビジョンが、いつまでも人々がこの地で安寧に生きてゆくための羅針盤になることを期待したい。(長野、以降Nと表記)

*1. ウルリヒ・ベック著／東廉、伊藤美登里訳、1998、『危険社会―新しい近代への道』

2. 50年ビジョンを作成するにあたり、これまでのまちづくりをふりかえる

ここで日野市のこれまでのまちづくりについて振り返ってみたい。自治体はまちづくり方針を示した基本構想を10年ごとに立てる。最初に策定された1971年の第一次基本構想では、人口増を積極的に受け止め、「住みよい都市」をめざし、近代的住宅都市への転換を掲げている。1981年の第2次基本構想では、「緑と文化の市民都市」として水や緑の保全範囲の拡大や質の向上も掲げるようになる。1995年の第3次基本構想では地球環境問題への対応や生態系への配慮という視点も加わる。2000年の第4次基本構想では参加と協働の視点が入る。そして2010年第5次基本構想では、基本理念に水と緑をたいせつにする、市民が主役、つながりに加え持続可能性を掲げている。

基本構想からみるまちづくりの方針は大きくは“自然と開発の調和”である。“調和”とはいうものの、それはつまり“自然を守りながら開発も進める”といういわば相反する目標を両天秤にかけたもので、その具体化はその時々々の国の政策や経済状況、政治的判断、時に住民の要望や圧力などをうけて決められてきたといえる。見方によってはどちらを目指しているのか分かりにくいまちづくりで、日野市はほんとうに水や緑を守ろうとしているのかといわれ、一方ではもっと道路を通し、ショッピングセンターやレクリエーション施設をつくり、都市的で便利な暮らしやすさへの要望もある。日野市にとってはどちらも必要だとすれば結局は市民が納得しながらまちづくりを進めることこそが大事だといえる。

開発により多くの水・緑が失われたが、それでも今なお“緑と清流”を掲げることができるのは、地勢的に土地のもつポテンシャルが非常に高かったということである。そしてこれからの50年をどうするかまさに節目だといえる。(N)



3. プロジェクトの進め方と位置付け

日野の 50 年後を描く当プロジェクトは、平成 23 年度からの馬場市長（当時）と学識経験者 3 名による「50 年ビジョンプロジェクト懇談会」を皮切りに、市内有識者による「市政経営懇談会」、平成 24 年度からは各分野で積極的に活動されている 50 の市民活動団体との「意見交換会」において『日野の将来像』について意見交換が行われた。さらに平成 23 年度末には七生公会堂にて「50 年ビジョンプロジェクトシンポジウム 夢のある町へ～自分たちの想いを語ろう」、24 年度末は日野市民会館小ホールにて「50 年ビジョンプロジェクトシンポジウム 拝啓 未来のあなたへ～日野の道しるべ」と題しシンポジウムが開催され、多くの市民が参加、意見が交わされた。

なお「意見交換会」を市民活動団体に限定したのは、それぞれの分野で活躍し、日野の事情を良く知る団体の方が、長期的展望にたち意見が出やすいということであった。市民活動団体のほとんどが市と“協働”という形で関わり、お互いの事情や考えなども知らない中でないということが大きく、これまでの 50 年を批判する場ではなく、前向きな意見がでるようにしたいと行政側が判断した結果である。

進め方は、まず市民団体・市政経営懇談会での意見交換から企画調整課がキーワードをピックアップし纏め、それをもとに学識者懇談会で話しあわれ、その後エコ地域デザイン研究所（以下、エコ研）と日野市役所とで話し合い、イメージを膨らませていった。市民団体の意見交換は分野ごとに 10 団体以上の集まりとなり、各団体 2 名ほど参加していたので多い時には 30 人以上の市民と市長との「意見交換会」となった。初めに各団体の紹介とそれぞれ 50 年後の日野について順番に話をしてもらい、一巡すると纏めて市長がコメントするという形で進められた。意見を集約するのが目的ではなく、様々な意見・提案を集めることが目的であった。傍聴者からは、市民に夢ばかり描かせてどうするのか、今の課題について話し合うべきではないかという意見もあった。

エコ研への依頼は、2006 年から日野の水辺に注目し、調査研究及び活動の継続に対する行政なりの評価があったからだと思われる。進め方については、エコ研は何ら関与せず、行政から提示されたキーワードを元に話し合い、具体的画にしていっていった。

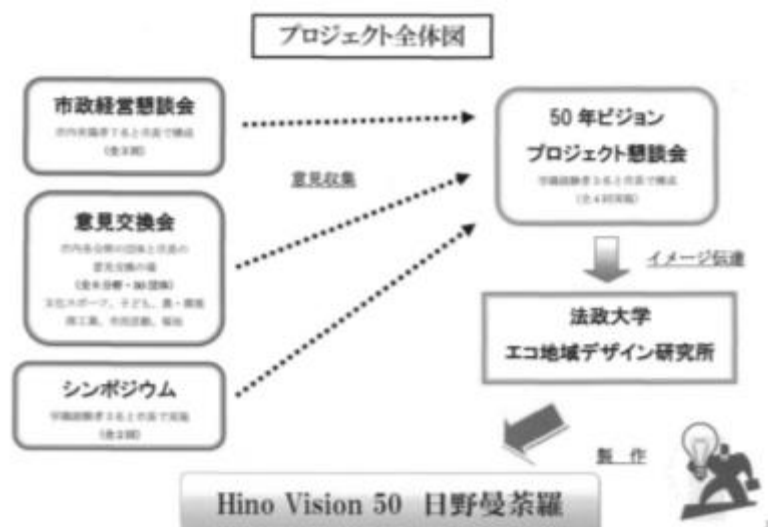


図 2. プロジェクト全体図

イメージの具体化の際、現状の様々な制約をどう考慮するかという意見があったが、50年後は、場合によっては地域の枠組みさえ変わっているかもしれない、目的でもふれたが今後様々な課題が待ち受ける中、社会システムを変えざるを得ないだろう。そこで現在の課題を浮かび上がらせるためにも今ある縛りは考慮せず描くということになった。そして50年ビジョン「日野曼荼羅」は完成し、24年度の「50年ビジョンプロジェクトシンポジウム 拝啓 未来のあなたへ～日野の道しるべ」で発表され、多くの市民の共感を得ることができた。

なお、この「50年ビジョン」は日野市のグランドデザインとして、目指すべきまちの姿として位置付けられることになった。

当報告書は、日野市で報告された内容にさらにプロセスなど加筆し、報告書「Hino Vision50 水都日野を目指して」としてまとめたものである。(N)

□各会の経過

<平成 23 年度>

平成 24 年 1 月 12 日 50 年ビジョンプロジェクト懇談会①

平成 24 年 2 月 6 日 50 年ビジョンプロジェクト懇談会②

平成 24 年 2 月 9 日 日野市市政経営懇談会①

平成 24 年 3 月 8 日 日野市市政経営懇談会②

平成 24 年 3 月 17 日 50 年ビジョンプロジェクトシンポジウム①

「夢のあるまち日野へ～自分たちの想いを語ろう～」

<平成 23 年度>

平成 24 年 7 月 24 日 意見交換会①（文化スポーツ分野）

平成 24 年 7 月 31 日 意見交換会②（農とみどり（環境）分野）

平成 24 年 8 月 29 日 意見交換会③（子ども分野）

平成 24 年 9 月 18 日 50 年ビジョンプロジェクト懇談会③

平成 24 年 10 月 15 日 意見交換会④（商工業分野）

平成 24 年 10 月 29 日 意見交換会⑤（市民活動分野）

平成 24 年 11 月 6 日 意見交換会⑥（福祉分野）

平成 24 年 11 月 15 日 50 年ビジョンプロジェクト懇談会④

平成 24 年 11 月 29 日 日野市市政経営懇談会③

平成 25 年 1 月 12 日 50 年ビジョンプロジェクトシンポジウム②

「拝啓 未来のあなたへ ～日野のみちしるべ～」

□プロジェクト協力者・団体

[50年ビジョンプロジェクト懇談会]（2回開催）

青山 侑（明治大学公共政策大学院教授）

陣内秀信（法政大学デザイン工学部建築学科教授）

細野助博（中央大学総合政策・大学院公共政策研究科教授）

[市政経営懇談会]（3回開催）

奥住方彦、中嶋ヒロ子、長田謙一、西久保秀紀、西村高幸、旗野洋、水野功

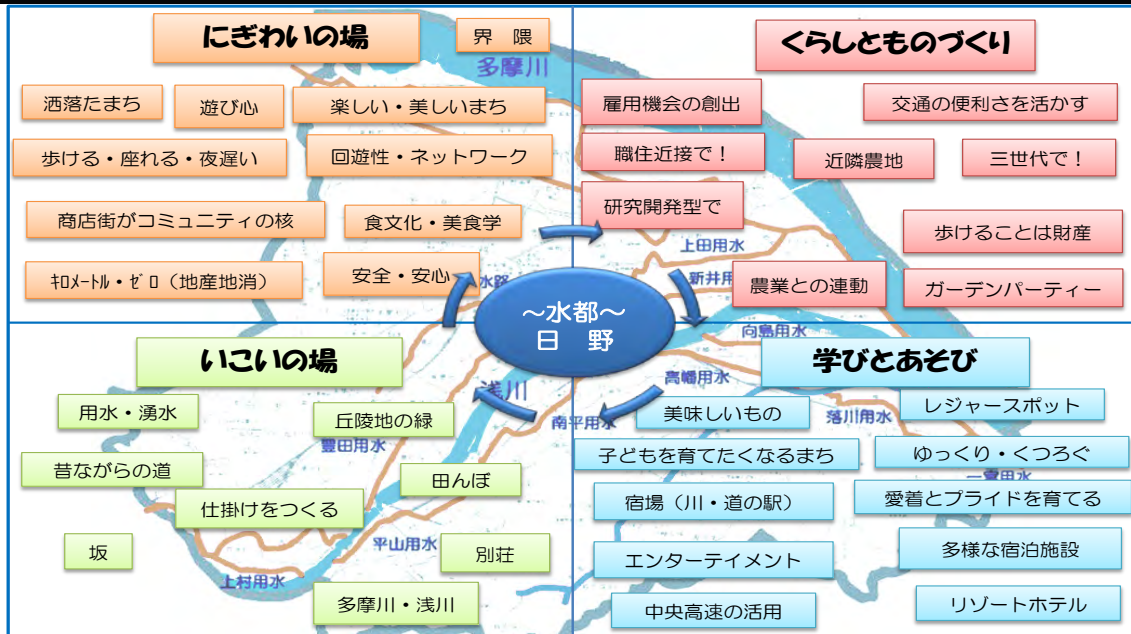
[意見交換会]（6回開催）

一般社団法人日野市体育協会、日野市スポーツ推進員、日野市文化協会、赤レンガプロジェクト、日野市国際交流協会、ひのアートフェスティバル実行委員会、ふれあいホールプロジェクトチーム、NPO 法人日野人・援農の会、東京南農業協同組合、日野市農業懇談会、日野の自然を守る会、ひの・まちの生ごみを考える会、日野市ごみ減量推進市民会議、日野市農業団体連合会、日野市青少年育成会連合会、NPO 法人子どもへのまなざし、日野市青少年委員の会、日野市民間保育園連合会、日野市私立幼稚園協会、特定非営利活動法人日野子育てパートナーの会、日野市立小中学校 PTA 協議会、特定非営利活動法人市民サポートセンター日野、魅力ある授業づくりプロジェクト、日野市商工会、日野市商店会連合会、平山台工業連合会、日野市工業振興基本構想推進協議会、日野市まちおこし連絡協議会、特定非営利活動法人日野市観光協会、社団法人日野青年会議所、日野市民政委員児童委員協議会、日野市赤十字奉仕団、日野市介護保険関連施設連絡協議会、ふれあいサロン協議会、ひのケアマネ協議会、日野市在宅介護事業者協議会、日野・多摩・稲城地区 保護司会日野分区、日野市老人クラブ連合会、日野市健全財政を考える会、ひの市民活動団体連絡会、平山台交流の会、なお「土曜のひろば」遊学会、四中地区・オヤジの会、特定非営利活動法人やまぼうし、多摩平の森自治会、公民館利用者交流会（るーぶ）、倉沢里山を愛する会、豊田団地自主防災会、石坂ファームハウス、日野市消費者運動連絡会

4. キーワード

意見交換、懇談会から得られたキーワードを4つのテーマで整理し、“水都日野”をイメージし、“日野曼荼羅”として配置し直す。

Hino Vision 50 -Hino Mandala-



日野市の方のキーワードをもとに、エコ研メンバーで議論し、イメージを膨らませていった。

Hino Vision 50 -Hino Mandala-



整理された各分野のキーワードを散りばめたイメージをHino Mandalaとして配置する。

図3. 4. 50年ビジョン、キーワードの関係図

5. 50 年ビジョン HINOMANDALAー 日野曼荼羅

Hino Vision 50 -Hino Mandala/Hino Layer-

Hino Mandala には Hino Layer という歴史の深層が存在する。

様々な意味、特徴のある要素、場面からなっている。

全体がつながって一つのまとまった世界を構成している。

日野そのもの。

一人一人の市民が、多様なシーン、場所を選択し、
組み合わせを理解し関わる。

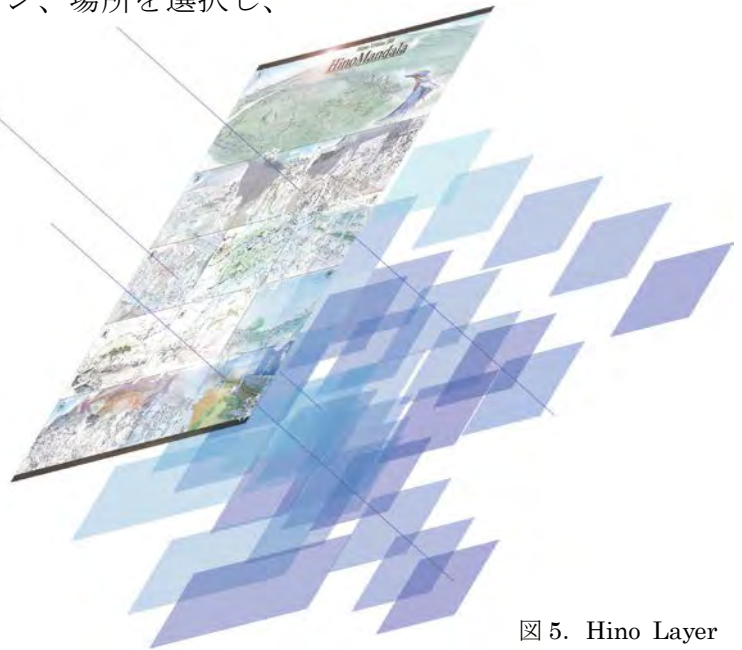


図 5. Hino Layer

* 曼荼羅とは、仏教（特に密教系）の世界観を視覚的にわかりやすく、象徴的に描いたもの。英語では広く他宗教も含め宇宙観 コスモロジーを著わす。特徴は複数の要素が秩序をもって組み合わせられている。

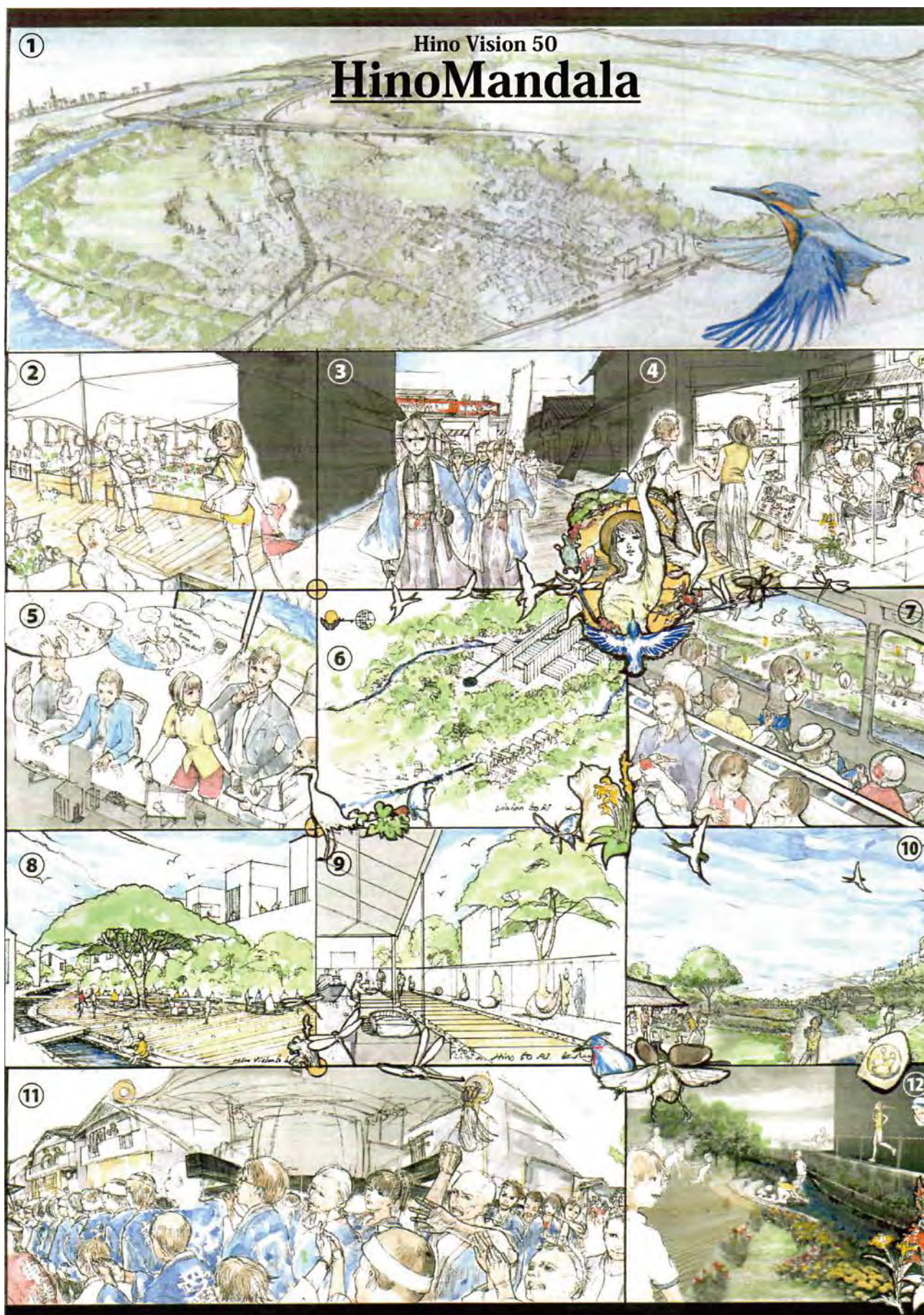


図 6. 日野曼荼羅

5-1. 歴史の深層 Hino Layer

日野の風景の骨格は、隆起した山々や降り積もった火山灰地が長い年月をかけ、雨に洗われ、海や河川に浸食され、およそ1万年前に形成された。内陸まで海だった時代、人々は台地や丘陵地の縁を住処とした。海が後退すると人々は低地へと移り、台地や丘陵地の裾野から湧く水を頼りに居を構えた。いつしか水の湧くその場所は神聖な場所として祀るようになった。狩猟、採集が中心だった暮らしから畑をつくり、水を引き米づくりが始まった。低地の田畑は洪水のたびごとに流されたが、人々は諦めることなく、水の恵みを糧とした営みが長い間続いた。

600年代に入ると、国のシステムが少しずつ形になり始め、武蔵国が誕生し、国府がおかれた。中央から派遣された役人により武蔵国は治められたが、土地を巡る争い等に備え、見晴らしの良い丘陵地や高台には館が築かれ、また信仰や祈りの場所になった。そういう時代も人々の水を糧とした暮らしは続き、西の国々から住みついた人々により新たな治水技術や水路技術がもたらされた。

江戸時代になると江戸の発展とともに人口が増え、江戸周辺の村々は食糧供給地となった。日野周辺の村々は江戸の米蔵といわれ、地形を巧みに活かした水路は網の目のように発達した。多摩川を渡り、用水が流れる甲州街道沿いに日野宿が置かれ宿場町として栄え、周辺集落は日野宿を支えた。

江戸の終焉が近づくと、天領地の多かった多摩から新選組が生まれ、明治になると新政府に対抗する自由民権運動が生まれた。支えたのは多摩の豪農であった。日野からも新選組隊士や自由民権運動家が生まれた。これらが生まれた背景には交通や情報の要衝でもあったことも大きい。

Hino Vision 50 -Hino Layer-

大地の上に生き続けている歴史の層(日野の宝)と各層の光る核



図7. 歴史の層と7つの層

農村であった日野は、米や養蚕による収入が主だったが、昭和恐慌による痛手から立ち直るため日野町は工場を誘致し、七生村は丘陵地の自然を活かし、観光化を進めた。昭和33年日野町と七生村は合併し、日野町となり、そして昭和38年日野市となる。当時の人口は五万人弱。高度経済成長期には住宅都市として、工業都市として発展し、現在大学、研究機関も立地する約十八万人のまちとなっている。

そして現在、工場、住宅や団地、学校、鉄道、道路などに埋め尽くされ、かつての面影は無くなったように見える。だがしかしよくみると水路には清流が流れ、田や畑があちらこちらに点在し、旧道をたどると数百年と続く農家集落にたどりつく。祭りでにぎわう神社や寺があり、ちょっと路地に入るとタイムスリップしたようなたたずまいがそこにある。清流には魚たちが群れ、そのそばで子どもたちが魚捕りに興じ、田や畑からは子どもから高齢者まで多くの人びとが収穫を喜び合う声が聞こえてくる。そんな日野のまちをレイヤーごとにみてみたい。(N)

5-2. A層—大地・水の形態

(台地・多摩川・浅川・程久保川・各湧水・各用水路)

水の郷日野は、3つの地形の上に成り立っている。市西部の台地、南部の丘陵地、東部に広がる沖積地である。東京都内において、これほど多様な地形が組み合わさった市区町村はないだろう。そしてその地形の上に、多摩川をはじめ、浅川、程久保川などの河川や湧水といった水系が流れ、水の郷日野をかたち作っている。



図8. 市内の地形と用水路、湧水、近世集落の分布

日野台地はローム層が堆積したもので、その下に更新世の多摩川や浅川の河床礫からなる河岸段丘を持つ。多摩丘陵は、かつては平坦地であったが、何十万年という年月をかけて流水の浸食を受けて現在の地形になったとされる。最後に、多摩川と浅川を挟んだエリアとその周辺には、土砂などが流水に運ばれて堆積した沖積平野が広がっている。

多摩川と浅川は、ともに市内を西から東へ向かい、東部で合流する。市の北側を流れる多摩川は、山梨県塩山市三ノ瀬地先の笠取山を水源とし、東京湾へと注ぐ一級河川。日野はその中流域に位置する。南側を流れる浅川は、多摩川水系の一つで、八王子市西端の陣馬山と高尾山の山稜を水源とする。市内にはほかにも、程久保川や谷地川などの小河川が流れ、どの川も地形の骨格を作り出す上で、大きな役割を担った。市内には現在も、台地や丘陵地に湧水が湧く。その中でも「中央図書館下湧水」と「黒川湧水」、「小沢緑地湧水」は、東京の名湧水57選にも選ばれている。

以上見てきたように、市内には河川と湧水によって豊富な水量があり、それを利用した用水路網が沖積地を中心に広がっている。戦後の急激な市街化や宅地化に伴う区画整理で多くの用水路が失われた。だが、用水路の総延長は116キロメートル（2012年調査時点）にも及び、都内最長の規模を誇る。市内の用水路の歴史は古く、十世紀頃のものと思われる用水路も発掘されているが、その多くは江戸時代になってから堀削されたものである。市内一帯の水田化を可能にした用水路網は、「多摩の米蔵」と呼ばれるほどの豊かな農村地帯をつくりあげた。（石渡、以降Ⅰと表記）

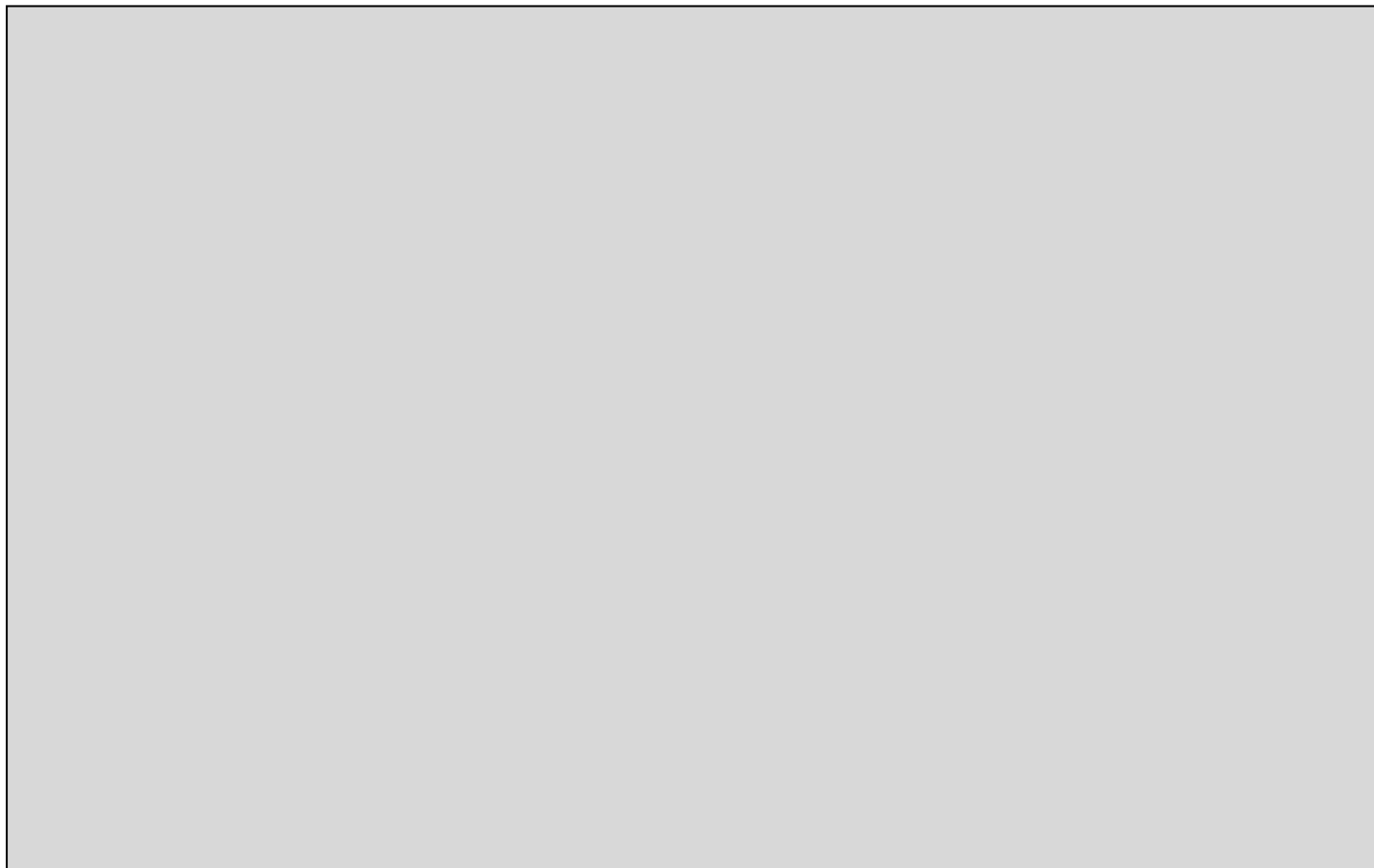


図9. 多摩川から見た江戸後期の日野市



写真 1. 八幡神社（豊田）の鳥居

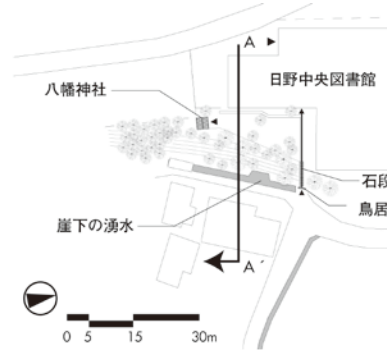


図 10. 八幡神社配置図

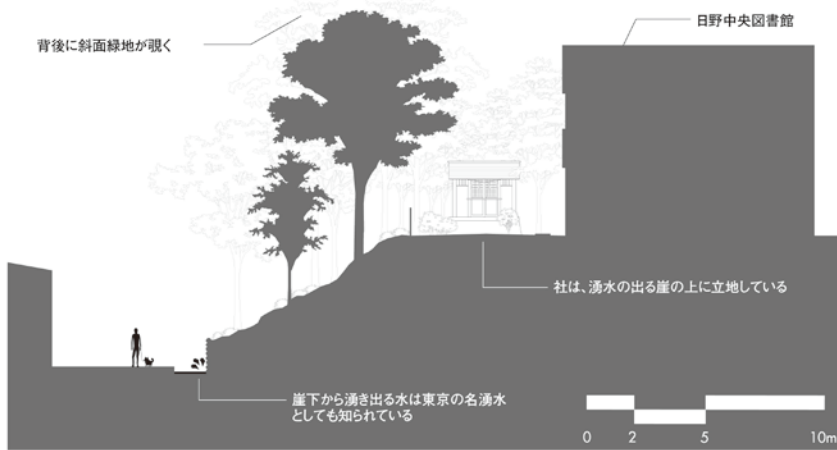


図 11. 八幡神社（豊田）と湧水群

5-3. B層一緑・農

(樹林・農地・水田／なし・トマト・ブドウ・柿・百草倉沢の里山・せせらぎ農園・JA 東京みなみ・・・)

2001 年日野市のみどりの基本計画策定に参加した市民の共通の願いは「日野市の緑と水に恵まれた環境を次世代に残したい」ということであり、そこから将来イメージは「水音と土の香りがするまち」となった。これはかつて日野にあった当たり前の風景だった。しかし毎年日野市から“みどり”は消えている(図 12)。

日野の緑といえば、多摩丘陵の緑、台地の縁には帯のように連なる崖線の緑がある。これらの多くはかつて薪炭林や堆肥、木材調達のための雑木林であった。現在は丘陵地や崖線の多くが公園、緑地保存指定や市の信託制度により守られている。その他、仲田の森、中央公園、大木島公園など大小の都市公園にまとまった緑がある。道路の街路樹とともに街並みを形成する緑地の環境・景観的効果は高い。道路沿いや水路沿いなどにも、季節ごとの花々が植えられ、思わず足を止め眺めたくなる場所もある。また工場や住宅など民間の緑地も貴重な緑である。

緑が増えることはその管理負担もまた増えるということである。特に民有地の緑はその負担から伐採処分されるケースも増えている。かつては鎮守の森や屋敷林もたくさんあったが、住宅が密集しはじめると落葉の苦情などにより伐採処分されるケースや区画整理事業や道路建設、民間開発により樹林地が無くなるケースもある。それまで暮らしと緑とは経済的にも精神的にも密接なつながりがあり、特に鎮守の森など樹木に対する神聖性などもあり、簡単に伐採するなどありえなかったが、数十年、数百年その場所に生きてきた樹木の存在が脅かされる状況となっている。

そんな中、雑木林ボランティアによる保存緑地の管理が進められている。伐採方法や管理方法などを学ぶ講習を受け、緑地の管理を行っている。担い手探しが課題となっているが、公園も現在市民団体などへの管理委託となっている。ガーデニングコンテストなども開催され、民有地の緑化、美化の啓発も行われている。

農地も貴重な緑資源である。日野には現在 11,029 アールの農地があり、ナシ、ブドウ、ブルーベリーなどの果樹やトマト、野菜などが栽培されている。それらの野菜などは自給率 25% (価格ベース) を目標に学校給食にも多く使用されている。農家が生業としている農地以外に市民農園、体験農園もあり、そのニーズが近年非常に高まっている。

市民が農に関わることは命の糧をつくる農業の理解にもつながるとともに、農作業に関わり新鮮な野菜を食べることで健康増進につながる。さらに新井の生ごみリサイクル農園では地域の生ごみをたい肥化し野菜を育て、子どもから子育て中の女性や高齢者まで多様な人々が集い、交流するかけがえのない場となっている。生ゴミリサイクルはかつてあった持続的な農業につながり、小さいながらも物質循環がなされ、まさに日野モデルとして推進すべき農園である。

日野の農業は農家の高齢化や後継者不足や相続税を払うために農地が売られ、農家総数、経営耕地面積は大幅に減少してきている。都市農業を守っていくとともに、市民が農に触れる機会を増やしていくためにも農地の確保が必要となる。

緑の効用は、CO₂ 吸収、ヒートアイランドの緩和など挙げられるが、緑や農が間近にある暮らしは、生活に潤いや安らぎ与え、心身のリフレッシュや癒し、健康をもたらすとされる。また生態系的にも緑

地は命を育む場として重要であり、植生の多様性が生き物の多様さにも繋がる。また水の豊かな日野にとって、水源涵養地としても残していきたい緑地や農地である。(N)



写真 2. 黒川清流公園



写真 3. 丘陵地の農地（石坂ファームハウス）

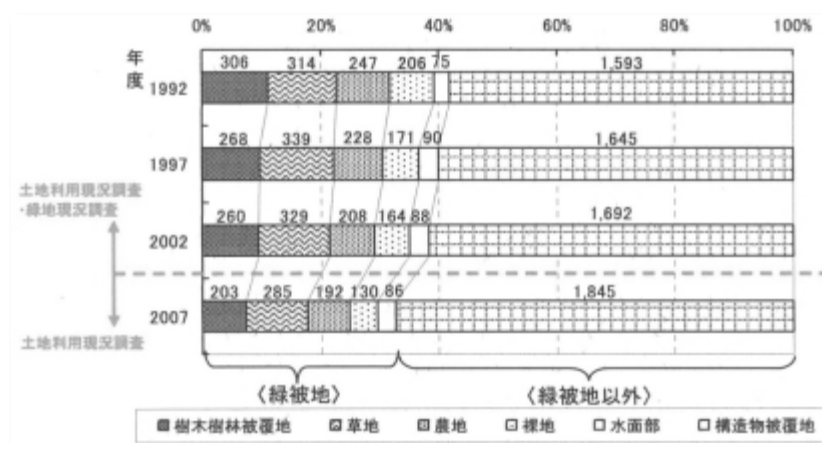


図 12. 緑の構成比

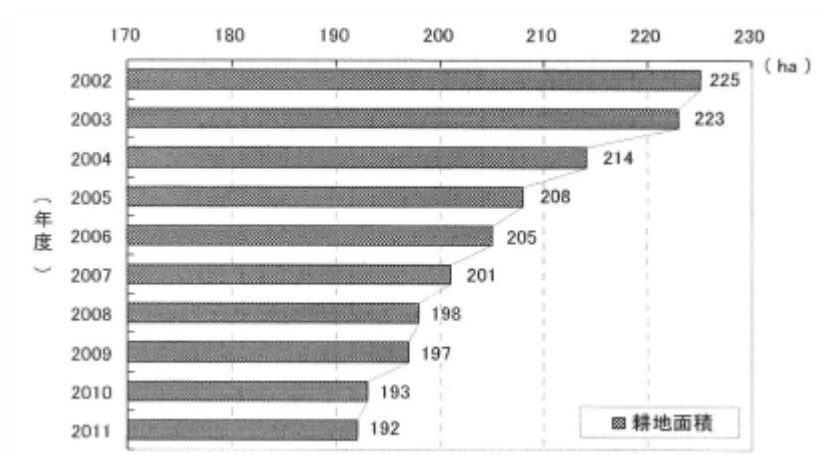


図 13. 経営耕地面積の推移

* 日野市の緑地・農業保全施策：環境基本条例、農業基本条例、みどりの基本計画、環境基本計画、農業振興計画ほか

5-4. C層-歴史

(高幡不動尊・石田寺・一里塚・日野宿本陣・新選組のふるさと歴史館・佐藤彦五郎新選組資料館・井上源三郎記念館・藤蔵・勝五郎生まれ変わり・百草園・多摩動物公園・・・)

遺跡の変遷を市内全体の地形に重ねて見ると、旧石器時代から縄文時代早期の早い時期に、丘陵地の程久保川周辺と台地南部の崖線沿い(現在の黒川清流公園一带)に人々の生活の痕跡が確認できる。高度な土木技術がなかった時代には、水が比較的得やすい湧水や沢の周辺にしか人々は住めなかったのだろう。これらの水資源は、水道が整備される前の人々にとって欠かせないものであり、水の得やすい場所から集落が形成されたと思われる。

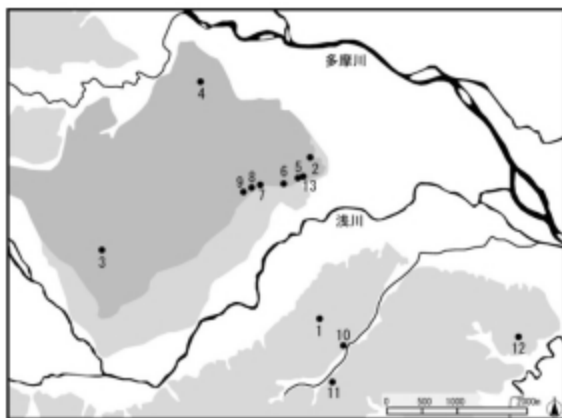


図1 旧石器時代～縄文時代早期(L1面が河原の時期)

1. 南平遺跡
2. 神明上遺跡 71 次
3. 包蔵地
4. セツ塚遺跡
5. 神明上遺跡 9 次 1 地区, 62, 66, 22 次
9. 第 81 地点
10. 程久保遺跡
11. 包蔵地
12. 仁王塚遺跡
13. 神明遺跡 No. 16 遺跡

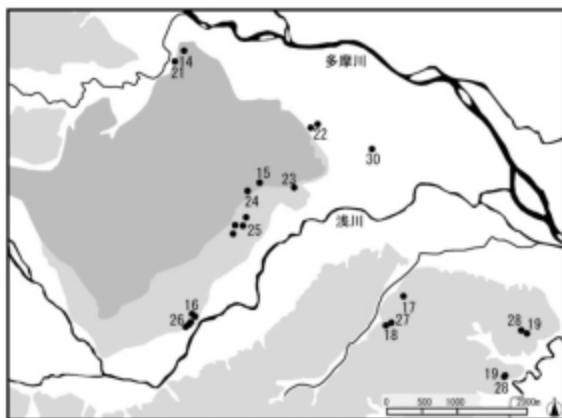


図2 縄文時代前期～縄文時代中期(L1面の段丘化)

14. セツ塚遺跡
15. 神明上遺跡 第81 地点Ⅱ次72 次
16. 平山遺跡 2, 4, 2次
17. 高幡台B地点
18. 高幡台遺跡
19. 仁王塚遺跡
20. 万蔵院台遺跡
21. セツ塚遺跡 2次
22. 神明上北遺跡 1, 2次
23. 神明上遺跡 64次, No. 16 遺跡
24. 神明上遺跡 第81 地点Ⅱ次
25. 吹上遺跡 1, 2, 3, 2次
26. 平山遺跡 2, 4, 2次
- 平山橋
27. 高幡台遺跡
28. 仁王塚遺跡

29. 万蔵院台遺跡 1次
30. 南広間地遺跡 2次

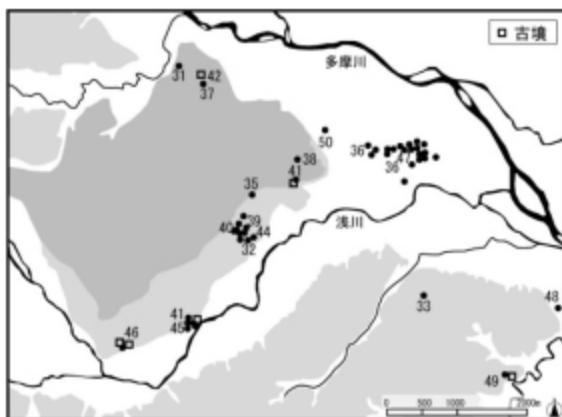


図3 縄文時代後晩期から古墳時代(L2面の段丘化)

31. セツ塚遺跡
32. 吹上遺跡 4次
33. 高幡台A 地点
34. 南広間地遺跡 試堀調査2次,
7次H 地点, 9次5 地点,
9次15 地点, 9次26 地点
9次28 地点
35. 神明上遺跡 第81 地点
36. 南広間地遺跡 試堀調査2次
37. セツ塚遺跡
38. 神明上遺跡 予備調査10, 42, 52,
58, 7次
39. 吹上遺跡 2次
40. 吹上遺跡 5次(5～9 地区)
41. 平山遺跡 2, 4, 2次
42. セツ塚遺跡

43. 神明上遺跡 2次
44. 吹上遺跡 1次,
5次1 地区, 5次5 地区,
8次, 豊田寺板遺跡
45. 平山遺跡 2, 4, 2次,
平山橋遺跡
46. 平山遺跡 13次
47. 南広間地遺跡 2, 3次,
7次A・D・H・Q 地点,
9次3・4・5・6・12・20・
24・28 地点
48. 落川一の宮遺跡
49. 万蔵院台遺跡 1, 2次
50. 神明上北遺跡 3次

図 14. 市内の遺跡分布

古代に入ると、現在も観光名所として賑わう高幡不動尊が開創する。その年代は不明であるが、大宝年間（701～704）以前ともいわれる。また、平山季重は一ノ谷の戦い（1184 年）で活躍し、その褒美として源頼朝から日野に土地が与えられる。その場所が現在ある平山の地名の由来とされている。

「多摩の米蔵」と呼ばれた江戸時代の市内は多摩郡に属し、村落は多摩川と浅川流域の低地と日野台地・多摩丘陵に分布しており、19の村があった。農村集落は、多摩川と浅川から取水した用水路網が広がり、沖積地一帯にも多く人が住むようになった。近世末に存在が確認される農村集落を水系との関係で分類すると、3つのタイプがある。沢を中心に形成された農村集落（程久保、百草など）、河川から取水した用水路を中心に形成された農村集落（万願寺、石田、落川など）、沢と河川から取水した用水路を組み合わせた農村集落（平山、豊田、川辺堀之内など）である。各集落は、異なる地形と水系を巧みに活かしながら集落を形成した。

農村集落のほか、江戸時代には都市機能を持つ宿場町が誕生する。日野宿は、慶長年間（1596～1614）に甲州街道の一宿として定められ、現在もその面影が本陣や蔵、短冊状の敷地割から伺われる。宿場町を建設する上でも、水の郷にふさわしい特徴を持つ。それは甲州街道の両脇に、日野用水上堰と下堰と呼ばれる用水路が通されたことにある。八王子市平町から取水している日野用水は、永禄10年（1567）

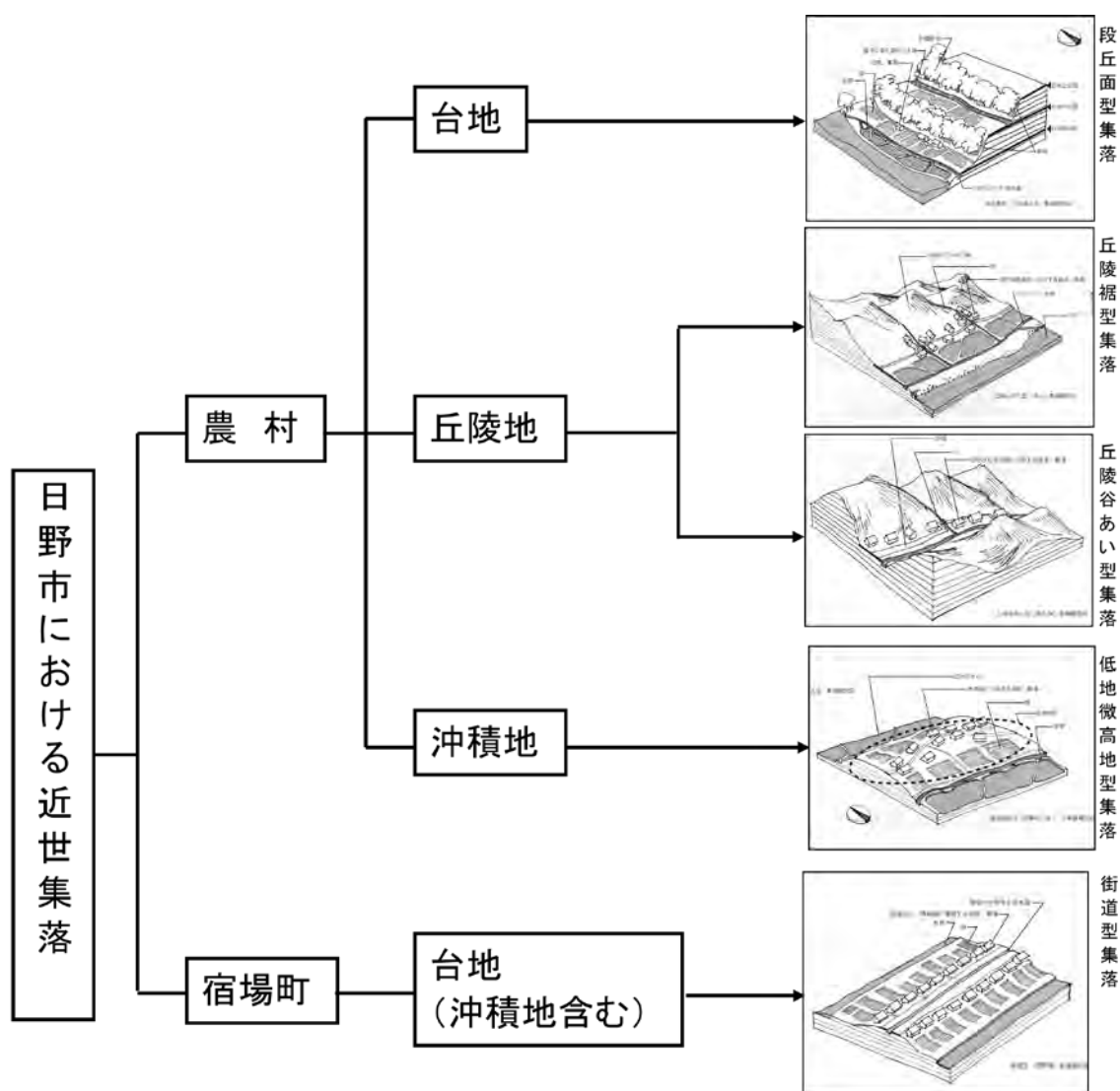


図 15. 近世集落の分類

という早い時代に、美濃国（岐阜県）からきた佐藤隼人によって開削された用水路で、市内において資料で確認できる最古のものである。古いだけでなく、地形を巧みに読んで用水路が通された点においても高く評価できる。江戸時代の街道沿いには本陣・脇本陣・旅籠屋などの都市的な機能を持つ施設が並ぶ一方、そのすぐ裏には広大な水田が広がっていた。つまり、用水路の水は宿場で生活する人々だけでなく、農業用水としても利用されていたのだ。

江戸近郷の農村として、当時の市内は経済や文化・人の交流など江戸との深いかかわりがあった。特に高幡不動や松連寺は名刹、風光明媚な場所として親しまれた。また、幕末から明治にかけて日野地域は進取の気性に富み、国政に目覚め政治に関わる人々が登場する。幕末には土方歳三をはじめ、佐藤彦五郎、井上源三郎といった新選組で活躍する人材を輩出した。

明治に入ると、市内でも近代化の動きが見られる。明治 22 年（1889）には甲武鉄道（現 JR 中央本線）の新宿―八王子間が開通後、日野駅と豊田駅が開設された。甲州街道の輸送を町の基盤としていた日野宿は大きくその様子を変えることとなる。浅川の南側においても大正 14 年（1925）には玉南鉄道（現京王線）府中―八王子間が開通し、百草・高幡・平山各駅が開設、翌 15 年に南平駅が開設された。工業の進出も始まり、昭和 10 年代には、日野台地の豊富な地下水を利用して次々に大工場が誘致された。第二次世界大戦後は昭和 32 年（1957）の日本住宅公団多摩平団地をはじめとして、東京のベッドタウンとして大規模な住宅開発が行われた。七生地区の多摩丘陵には高幡台団地・百草団地などの巨大な団地や住宅分譲地の開発が続き、景観は大きく変貌した。

近代化によるインフラや工業が発展する中で、東京近郊の行楽地としても日野は親しまれた。平山ゴルフ場（大正 14 年）、行楽養魚場の鮫陵源開設（昭和 11 年）、都立多摩丘陵自然公園の指定（同 25 年）、また都立多摩自然動物公園の開園（同 33 年）といった施設が誕生した。その後の昭和 33 年（1958）には多摩動物公園、昭和 36 年には多摩テックがオープンした。

急激な市街化が進む中、昭和 33 年には七生村と日野町が合併し日野町となる。そして同 38 年に市制が施行され、日野市が誕生した。（I）



図 16. 台地（川辺堀之内）の変遷

左：1947 年、右：現在



図 17. 丘陵地（平山）の変遷

左：1947 年、右：現在



図 18. 沖積地（万願寺）の変遷

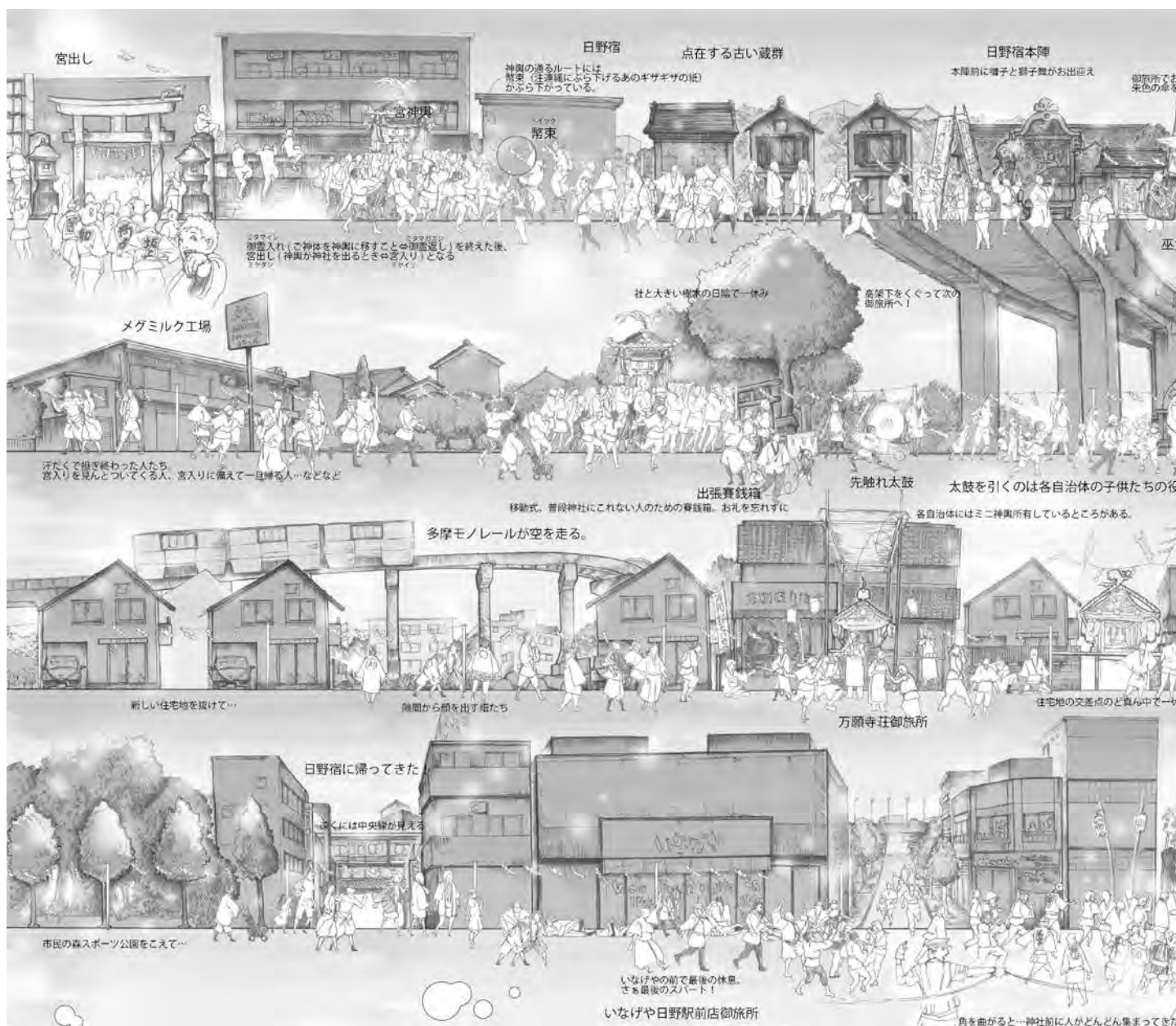
左：1974 年、右：現在

5-5. D層—まつり・観光

(新選組まつり・よさこいまつり・たきびまつり・たかはたもみじ灯路・平山季重まつり・産業まつり・アートフェスティバル・さくらのつどい、ルート・エコツーリズム・・・)

秋は祭りの季節。日野中からお囃子の音が聞こえてくる。地域で古くから伝えられた祭りもあれば、新しく始まった祭りもある。祭りが盛んな地域は、まちも人も活気がある。祭りを通じ、その地域の歴史、伝統、文化は受け継がれ、それはその地域の誇りとなる。日野宿の八坂祭りもそんな祭りである。祭りはかつては村中が協力し、取り行っていた。いまでは先祖代々日野に住む住民と新しく日野住民となった人々が共に祭りを盛り上げている例も多い。古い祭りは自然と密接に結びついている。暮らしの安寧や豊かな実りを願い、人々は神々に祈る。

今では祭りも多様化している。新選組祭りは新しい祭りだが、日野のアイデンティティーを意識させる祭りであり、市外からも多くの人々が訪れ、新選組を観光の目玉にしている日野市のその最大のイベントである。よさこい祭りは今や全国的ブームだが、踊りを通し、神輿担ぎとまた違う一体感や楽しみとして地域を一つにしている。



祭りではないが昔からの行事が自治会を中心に復活し始めているのも面白い。1月になると日野のあちこちから白い煙りが立ち上る。どんど焼きの煙りだ。仲田の森では音楽やアートを皆で楽しむアートフェスティバルも10年以上続く市民の夏の祭りである。その他地域や住民が主体となった祭りやイベントは数多い。文化的祭りでユニークなのが8年前から始まる旭が丘の「たきび祭り」だ。地元に住んでいた童謡『たきび』の作者、異聖歌に因んだ祭りである。たき火を囲み童謡を歌ったり、お芋を焼いたり、模擬店も出て賑やかな祭りとなっている。主催は地元の旭が丘商工会である。平山季重祭りも新しい祭りだが、丘陵地のウォーキングも組み込まれ地域や歴史を知るイベント的祭りとなっている。

日野には1300年以上の歴史を誇る高幡不動尊があり、重要文化財の仁王門、不動堂、丈六不動三尊がある。そこでは宗教的行事他あじさいまつりやもみじまつりなど季節ごとに様々な行事が行われ、年間200万人と多くの参拝者や観光客を集めている。

今や祭りは宗教的意味合いよりも、まちおこしや地域の繋がりづくりの仕掛けの一つとして重要になりつつある。皆でつくり上げ、皆で楽しむ祭りや催しはこれからも時代と共に少しずつ形を変え、受け継がれていくであろう。(N)



写真 4. 八坂祭



写真 5. ひのアートフェスティバル

5－6．E 層－施設

(ふれあいホール・ファーマーズセンター・日野煉瓦ホール・ふれあい橋・・・)

どこの町にも住民の暮らしを支え、豊かにするために市民ホールや体育館、公民館、博物館、図書館、地区センターなど公共施設が整えられ、それらの施設で市民は話し合い、学び、文化的活動やレクリエーションなどを行い、さらに様々な活動の支援や相談、ケアが行われている。小さい施設ではあるが、2005年に開設した環境情報の発信や団体の交流、活動の支援を行っている環境情報センター（かわせみ館）では、2011年度実績で、当センターを訪れた人は年間2800人おり、センター自ら環境学習講座を開催するだけでなく、市内の環境関連の10団体以上が会議を行うなど活動拠点にもなっており、今では市民にとってはなくてはならない施設となっている。2012年にオープンしたファーマーズセンターは、日野産農産物のPRとともに市民の農とのふれあいの場づくりとしても期待されている。市民活動が活発になればなるほど、これらの施設の需要は高まるため、市民が利用しやすい施設にしていくことが望まれる。

社会基盤である道路や鉄道、下水、公園、橋なども整備され、生活環境の質を確保している。日野市は交通の要衝であり、JR、京王線、多摩モノレールと小さな自治体ながら駅も多い。また市内中央を浅川が東西に流れ、南北をつなぐ橋が6本も架かる。現在も未整備の道路や下水道もあり、4か所で区画整理事業も進行中ではある。基盤整備が落ち着くのはまだまだ先のことになるが、早くに整備された施設の更新や補修も始まり、右肩上がりの経済の時代とは違い、莫大な費用の捻出が今後の課題となるようである。

社会基盤づくりや施設配置はまちづくりマスタープランに基づき行われているが、長期的な事業になると時代に合わなくなる場合もある。かつては道路建設や区画整理事業はその土地の環境や歴史などあまり顧みることなく進められてきた。現在進められている、あるいは進めようとしているこれらの事業において、かろうじて残った日野の歴史や環境資産を活かしながら進められることを願わずにはいられない。(N)



写真 6. 浅川に架かる歩道橋のふれあい橋

5-7. F層-工業

(日野自動車・エプソン・GE ヘルスケアジャパン・富士電機・帝人・千代田運輸・各種工房／アトリエ・各種商業・2次～産業・・・)

日野市は、東京西郊の工業都市や養蚕地帯としての一面も持つ。昭和に入って大きな工場が市内に進出するが、それ以前から近代化とともに工業が行われていた。

日野では近世以前から養蚕が行われていたが、明治10年代から盛んになり、蚕の飼育技術に関心が高まった。明治20年代からの生糸輸出の隆盛に伴い、自由民権家であった日野義順、天野清助により、日野に扶桑社が設立され、地域の養蚕の振興に大きく寄与した。昭和初期に入り、蚕や桑の品種改良・品質の向上を目的として蚕糸試験場日野桑園が置かれ、現在も残っているのが蚕糸試験場第一蚕室である。養蚕の衰退とともに日野桑園は昭和55年(1980)に筑波へ移転する。その後、敷地一帯は廃墟の中に自然の森が育ち、市民の人達から「仲田の森」と呼ばれ親しまれている。

昭和に入ると市内に大工場が多く建設され、その動向は大きく分けて2つの時期がある。昭和10年代と昭和30～40年代である。



図 20. 大工場の進出 (1942 年の空中写真を元に筆者が加筆)

昭和10年代では、昭和恐慌の影響で危機的状況に陥った日野町は大工場を誘致することによって、苦境を乗り切ることができた。工業都市としての日野はここから始まったとされる。その時期に日野五社などの企業が日野へ進出する。日野五社とは、六桜社、日野重工業（現日野自動車）、富士電機豊田工場、神戸製鋼所東京研究所（現神鋼電機）、吉田時計店株式会社。日野に多くの工場がやって来た理由は、豊富な水資源にある。日本篩絹株式会社もそのひとつであった。時代や用途は変わっても、日野にとって水が人々を引き寄せる大事な要素であったことは注目にあたいする。工場の従業員の住居として社宅やアパートが市内に登場したのもこの時期である。

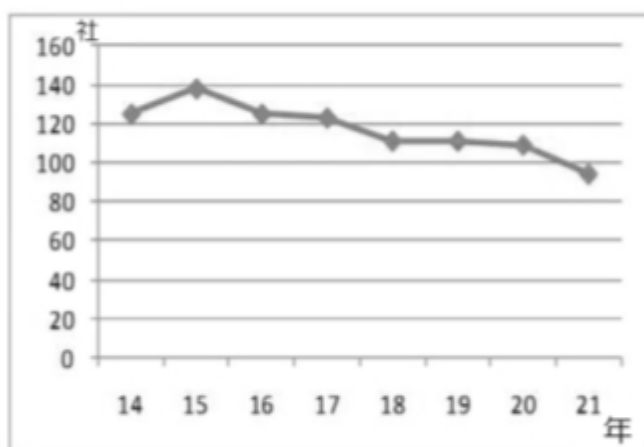
もうひとつのピークは、昭和30～40年代である。東京への人口集中を背景に、日野市は工場と住宅が一体となった「衛星都市」の建設を目指した。この時期に多摩平団地や平山工業団地が登場した。このような工場の立地とそれに連動した街づくりの取り組みは、街の景観やそこに暮らす人々の営みを大きく変え、今日の日野の基盤を形づくることになった。

工場誘致は戦後も行われ、工業都市として日野市は大きな発展を遂げた。その成果として平成15年からの6年間、工場出荷額が都内1位となり、平成17年からの3年間は1兆円を超えた。これらの工場は、雇用の場だけでなく法人市民税が市税の約1割を占めるなど長年、日野市を支えることになった。

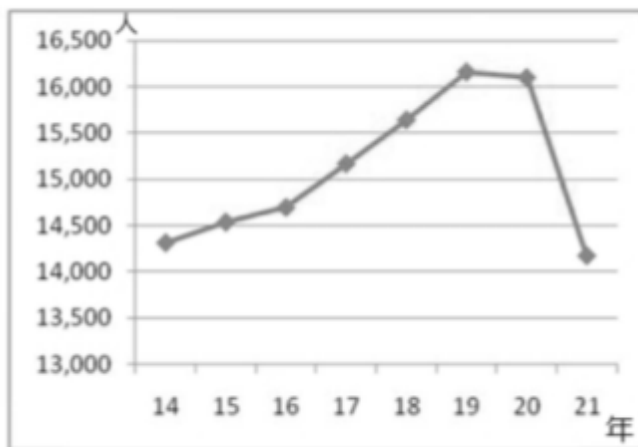
近年、市内の大工場が次々と撤退する動きがみられる。平成23年（2011）には、東芝日野工場の閉鎖と日野自動車の工場移転が発表された。日野の財政やまちづくりにおいて、これまでの工場に頼った時代から脱却し、新たな将来ビジョンを根本的に考え直す時期に直面している。

日野市では、平成23年3月に第5次日野市基本構想・基本計画「2020プラン」を策定し、『顔の見える山学官金の担い手による内発的産業創出都市「日野」の実現』を目指している。市の内外には大企業、中小企業、大学、金融機関、企業活動を支援している産業支援機関等が多くある。「顔の見える」有機的な産学官金ネットワークの構築により、参画する企業等の相互交流を通じた連携・融合を活発化し、産学官金連携を通じた「研究開発や新規事業の創出」が行われ、力強い地域経済の仕組みとなるよう取り組んでいる。(I)

●事業所数



●従業者数

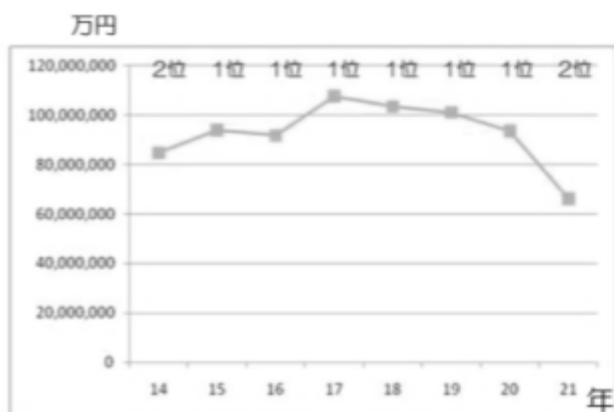


※工業統計調査 従業員規模4人以上の事業者対象

図 21 (左). 事業者数の推移

図 22 (右). 従業者数の推移

●製造品出荷額等



●市税の推移

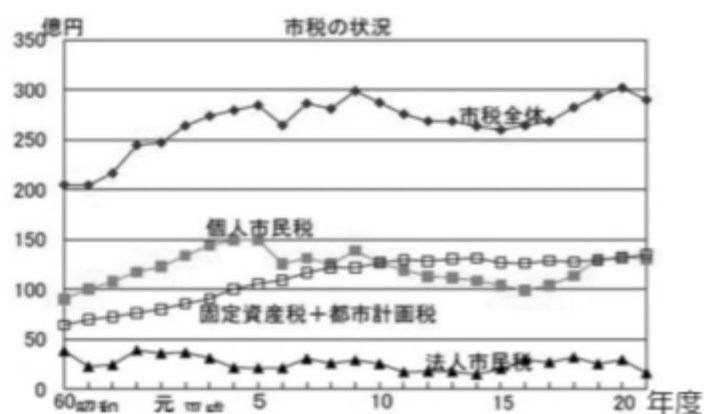


図 23 (左)．製造品出荷額の推移

図 24 (右)．市税の推移

5－8．G 層－研究・教育

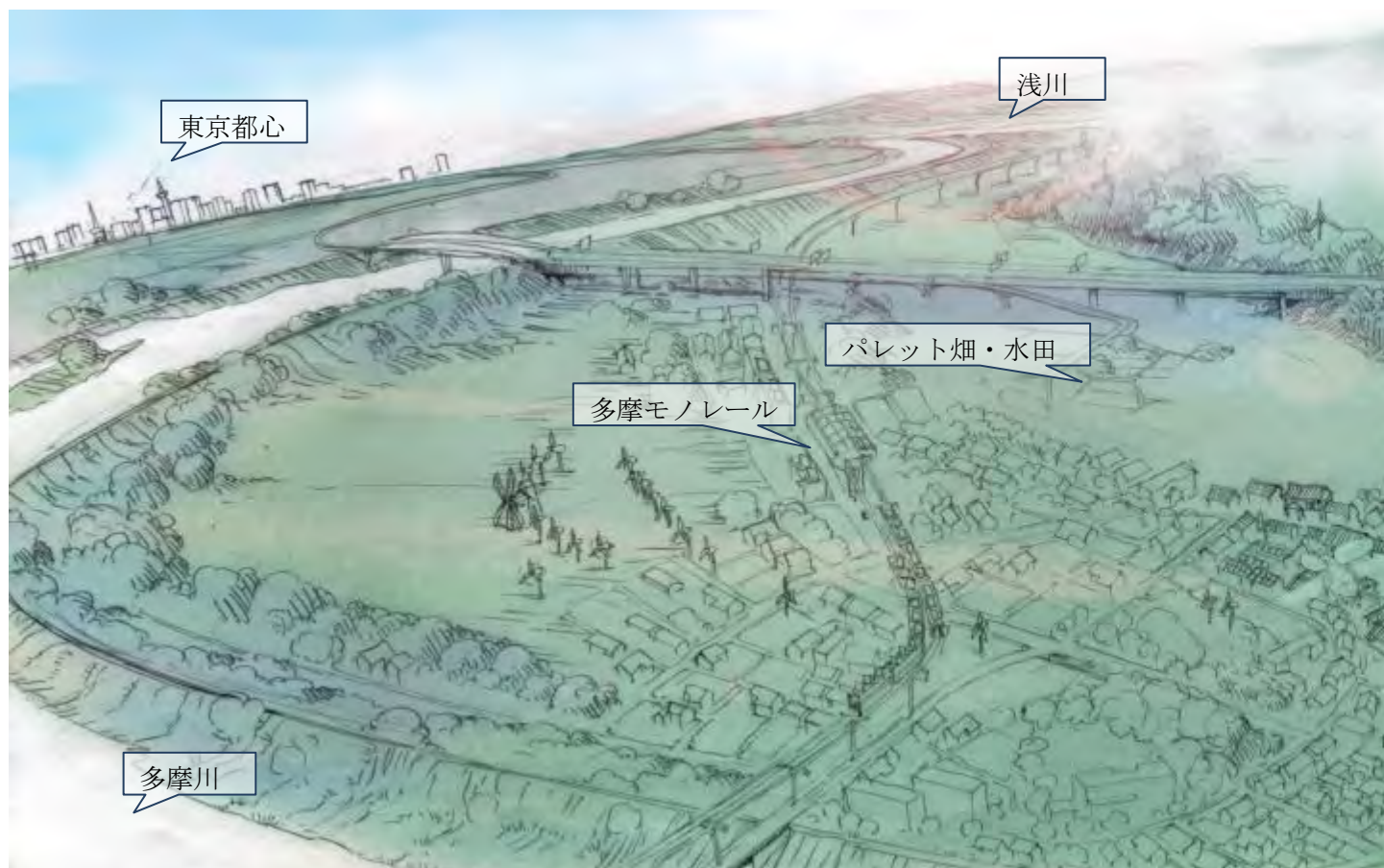
(各種研究所・実践女子大・明星大学・首都大学東京・・・)

日野市には 3 つの総合大学（実践女子大学、首都大学東京、明星大学）が立地する。学的貢献だけでなく、それぞれの大学の専門分野や学生の力を地域で活用していくことが期待される。大学の地域貢献においては既に実践女子大学では大豆プロジェクトや多摩平団地の高齢者の健康維持活動、食育プログラムづくりなどに貢献している。明星大学は東光寺緑地の下草刈りのボランティア、首都大学システムデザイン学部もアート面で日野の地域のおこしを行っている。また八王子に立地する中央大学は日野市に大学が隣接することから、百草地区雑木林の保全活動を行っている。

2012 年度、日野市は工業振興計画を策定した。市内大企業だけではなく 300 社以上ある市内中小企業の優れた技術力が見直され、それらの中小企業や研究機関と市内大学の研究力を「みえる化」するために「企業の魅力 PR レポート」も作成された。市内研究機関や大学の研究室など産官学コラボレーションの推進も始まっている。(N)

5-9. H層-将来像

○日野俯瞰図



概要

50年後の日野全体を見渡すー地平線を、世界を見渡す鳥の視点と多角的な魚、虫の視点を併せ持ち、日野を見渡す。

- ・東京都心と富士山を同時に見据える。人の集まる都心と雄大な自然の境界に位置する日野。

ハイブリッドな特性をも持つまち

- ・カワセミの視点：人がいつの時代も目指し続けてきた俯瞰の視点。どこまでも広がる地平線。

広角レンズ。グローバリゼーション

- ・アユの視点：従来と異なるモノの見方。魚眼レンズ。繋げる視点。張り巡らされた水路からの視点。

ローカリゼーション

キーワード

水都 田園都市 個性あるそれぞれの駅 多極集中 持続可能なまち エネルギー自給自足 ソーラー発電 小水力の活用 循環型サイクル エコロジカルネットワーク 市民の力による歴史エコ廻廊 観光 地震に備えたまちづくり 水緑をこれ以上減らさない 自然体験の場を残す 自然を生かした教育 誇りをもてるまち 3世代でも一人でも住み続けられるまち 自立した市民 職住近接

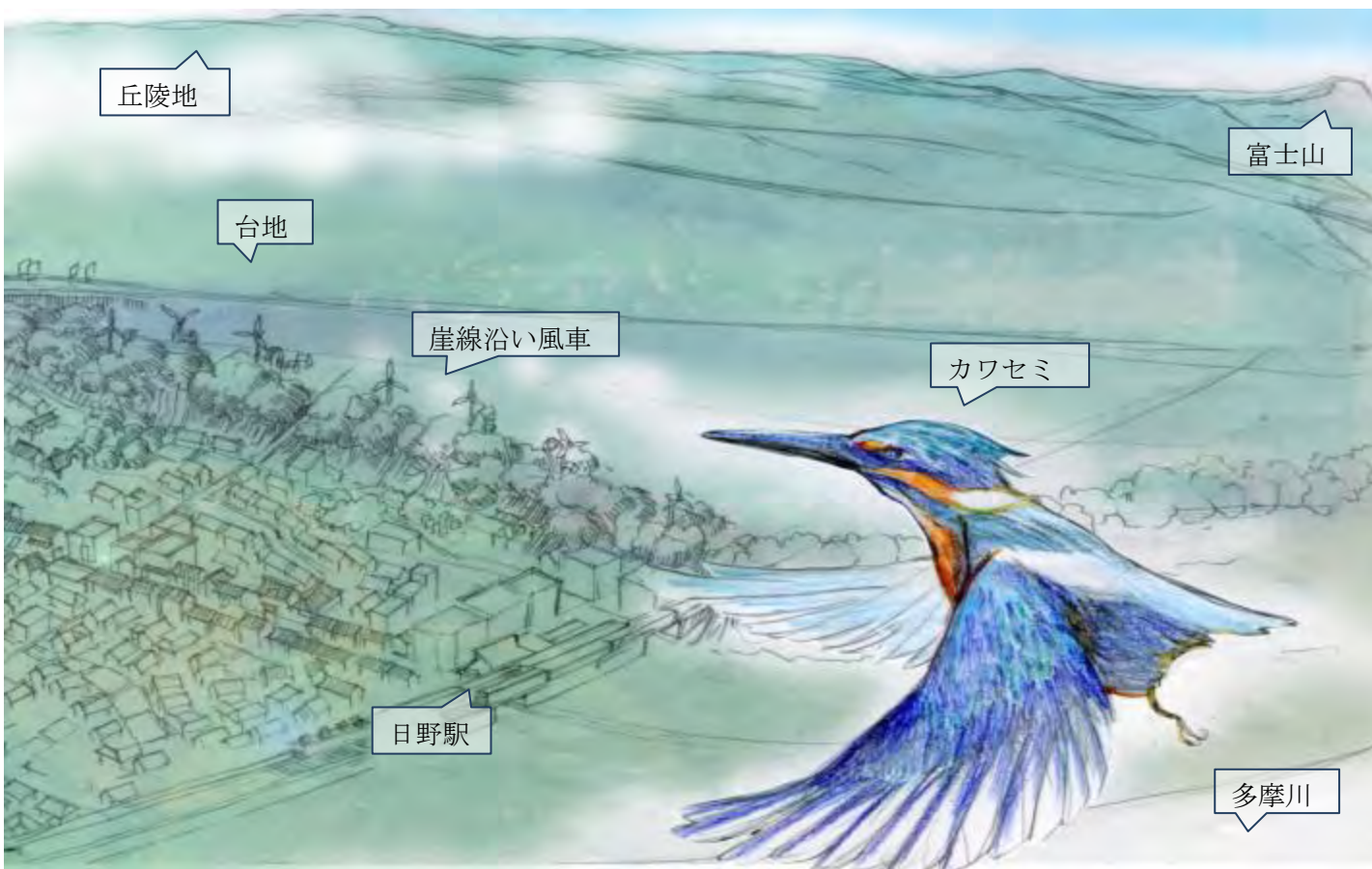


図 25. カワセミの視点から見た市内

解説：日野の 50 年後を鳥の目線で俯瞰する

都心から多摩川に差し掛かると一気に視野が広がり、景色が変わる。雄大な川の向こうに市街地が広がり、緑覆われる多摩丘陵と台地の縁の緑の帯が目に入る。2本の河川の浸食による段丘崖は緑に覆われている。中央に横たわる浅川の広々とした空間。水面が輝いている。さらに南西の関東山地の向こうに富士山を望む。かつては日野の各所から富士山を望むことができた。いまでも浅川に架かるふれあい橋はベストスポットの富士見橋である。やや北に目を移すと多摩川、市街地の先に狭山丘陵の緑が薄い帯状に延び、その先には筑波山も望める。そう日野は都心から丘陵地の向こうに関東山地、そのまた向こうに富士山、反対に目を移すと筑波山まで見通せる場所である。

かつて馬車や徒歩で人々が往来した甲州街道には電気自動車が行き交う。中央線と交わるところに日野駅がある。中高層のビルに囲まれているが、相変わらず多摩の田園を思わせる民家風の駅舎である。木造駅舎は東京では日野駅だけになってしまった。マニアにとっては貴重な駅舎である。

甲州街道から川崎街道を南に進み、浅川を渡ると多摩丘陵の麓に高幡不動尊があり、高幡不動駅がある。モノレール、中央自動車道とかつて交通の要衝であった日野らしく、道路や鉄道が交錯する。

駅前には中高層ビルが立ち並ぶが、低地部には緑の田畑が復活し、水路に清流が流れ、そこでは子どもから大人まで様々な人々が集い、野菜づくりに励み、収穫を喜び合う声が聞こえてくる。(N)

○ものづくりの郷～テクノタウンから工房まで

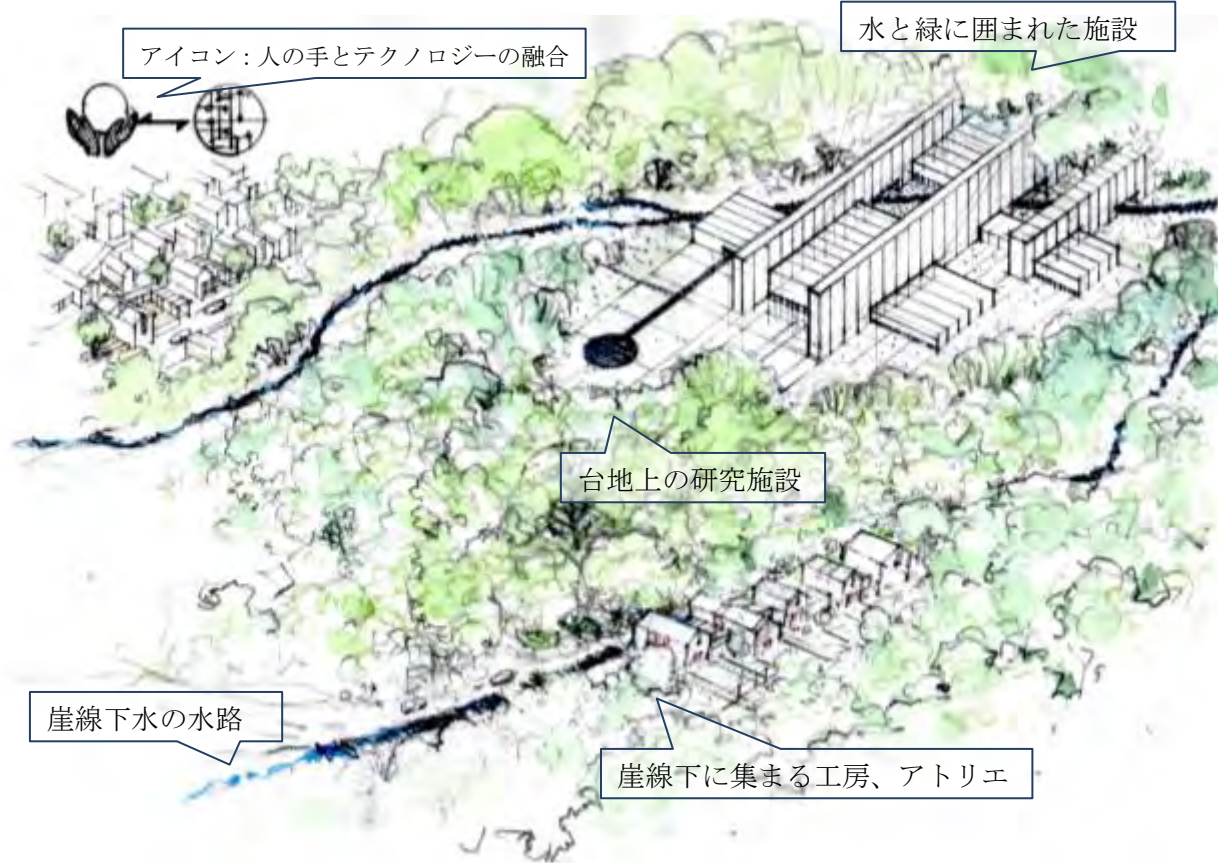


図.26

概要

- ・水と緑豊かなハイクパーク。クリエイティブインダストリーと研究所。可変構造。
- ・光る中小企業数百社のネットワークしながらの集合と点在。シナプス。
- ・育つ起業家精神
- ・ベッドタウンから経済的に自立したまちへ
- ・職住近接のゆとりある暮らしへ
- ・雇用の機会の創出
- ・ビジネスモデルの創造
- ・地域に紛れている工房
- ・地場産業・六次産業
- ・環境がいいから企業が来る。緑に包まれた生産地



図 27. 工業のネットワーク.

キーワード

優れた技術・労働力の継承 ものづくり日野 内発型産業 小さくて先端 自立的システム アグリビジネス 農との連携 新しい農業 六次産業 健康医療産業 地域密着 起業家精神 中小企業連携 工房 小水力活用 エネルギー自給 職住近接 女性の活用 子育てしながら働ける きらり

と光る企業 緑の中の企業 国際化 環境のいいところにいい企業はくる 田園型クリエイティブ
インダストリー

解説

長引く不況、円高、大企業撤退などにより事業所からの税収減や働く場が失われていくことは日野市の財政にも大きな影響を与えることとなり、民間に任せていた産業部門の活性化によりやく日野市としても取り組むことになった。そして平成24年には工業振興基本構想を策定した。その中では10年後の日野市の姿として、次のように描いており、そしてアクションプランとともに産官学金一体となり推進体制をつくるとした。

「市の工業の強みを活かしながら、地域の内部から内発的に新産業の創出や既存企業（中堅・中小企業）の新分野への事業展開がなされ、市内企業の競争力が高まり、成長性のある産業が集積し続ける都市の実現を目指す必要があります。この実現のためには、攻めの企業活動をバックアップする「基盤力」の強化、ネットワーク構築による「連携力」の強化、既存事業の磨きあげ、多角化・事業転換等の第二創業による「経営力」の強化、企業の最大の強みとなるような「技術力」の向上、人材を確保し、育成する「人材力」の向上に取り組んでいくことが重要です。特に今後は、成長性のある産業分野として、国の『新成長戦略』、東京都の『10年後の東京』と連動し、「環境・エネルギー関連分野」、「医療・健康関連分野」をとらえながら、市内企業及び企業を支える大学・金融機関・産業支援機関が事業活動、支援活動をしていくことが必要です。内発的な産業都市は、地域を支える中小企業の育成を図るだけでなく、新たな雇用を創り出し、市政の財源となる税収を増大させ、ひいては市の経済的自立を促すことができると考えられます。」

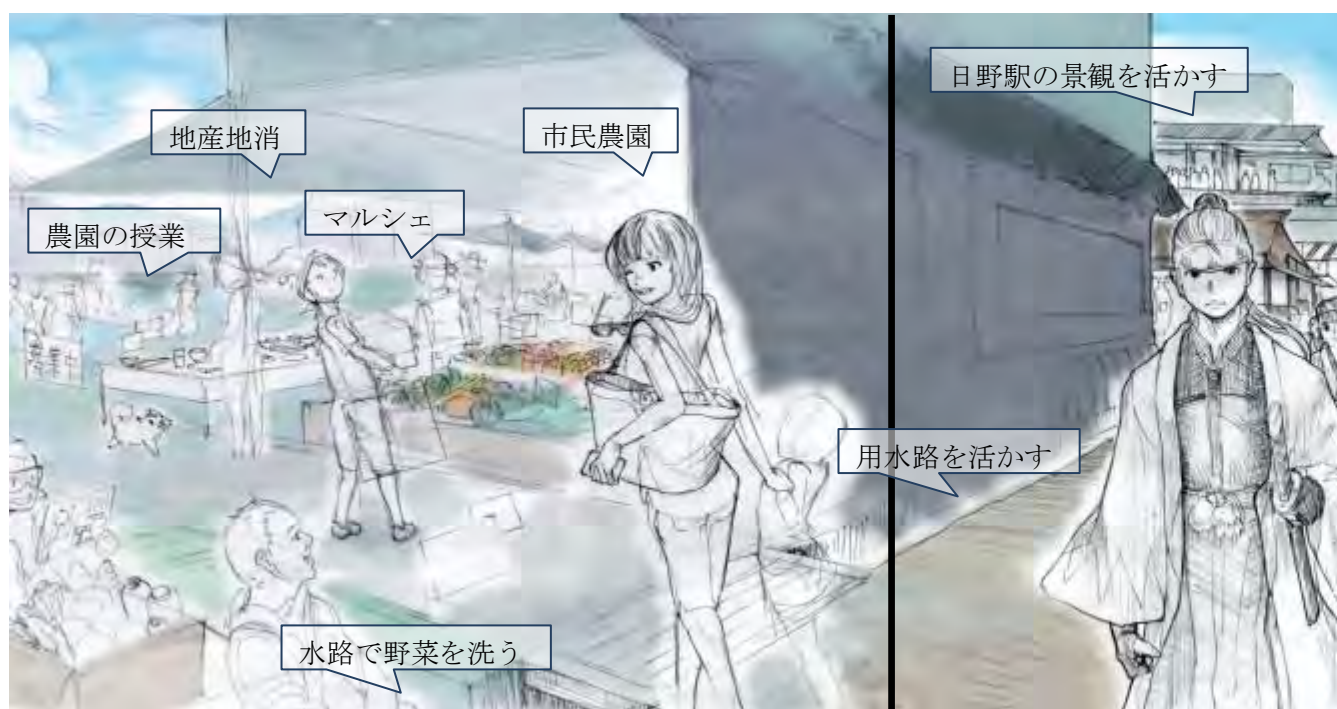
振興計画の成果として、台地にあった大規模工場跡地は緑の中の工房や研究所として生まれ変わり、先端研究・開発の場となり、かつて自動車の名で日野をグローバル化したように、世界中から研究者・技術者が集まる場となり、日野をグローバル化している。

環境の良さを求め集まる企業の連携や融合を進めるために交流センターが設置され、そこからあらたなグリーンイノベーション、ライフイノベーション分野などによる多くの創造的事業やソーシャルエンタープライズが生まれた。

特に、超高齢社会を見据え始まった“都市農業をベースとした健康づくり産業”は、市民の健康増進、医療費抑制に成功した。今では都心や海外からも多くの人が日野を訪れている。“都市農業をベースとした健康づくり産業”とは、日野産農産物をつかった特産品だけでなく、日野産農産物を使ったレストランでの食事、農作業体験による健康づくり、ストレス解消およびリハビリテーション、病院での健康チェックや指導などである。都心に近く、環境に恵まれ、農地を保存、再生することで生まれた新たなビジネスである。都市農業だけでなく川や用水沿い、丘陵地でのウォーキングなどとも組み合わせられ、滞在型、日帰りコースなど多様なツーリズムコースが用意される。

健康、環境産業は女性や高齢者にも多くの働く場を提供し、職住近接であり、時間的余裕からアフターファイブに市民活動や野菜づくりなど子育てしながら働くことができる場となっている。そのためさらに日野への居住希望者が多い。(N)

○街道のまち日野



概要

現在でもなお上堰、下堰の水路に挟まれ、古くから多くの人の往来を見守ってきた日野宿は、歴史的、文化的、地理的視点から見て日野の生命線といっても過言ではない。この連絵では同じ場所で3つの異なる時間が同時に流れている。

街道のまち日野は以下の三つのシーンから成り立っている。

(左絵)「日野に広がる農地と繋がったマルシェの界限」

(中絵)「日野の歴史的な中核となる日野宿」

(右絵)「裏路地のオシャレな雑貨屋さん」

- ・ヒューマンスケール、人が主役のまち。
- ・回遊性のある駅周辺～仲田の森へ
- ・歴史的な資産（目に見えないモノも含む。敷地割、本陣、路地、蔵、用水路、旧原宿駅から移築した駅舎）等を活かす
- ・宿場町が持ったもてなし感覚と交流の場の再生

キーワード

街道のまち 新選組のまち 木造駅舎 ブランドイメージ 観光 若い人が夢見るまち 小さい商い 個性ある商店街 アンテナショップ 商店街がコミュニティの核 賑わい・交流の拠点 歩ける・座れる・夜遅い 回遊性・ネットワーク 楽しいまち 粋なまち しゃれたまち 美しいまち ごみごみした中に宝 遊び心 界限 カフェ イベント広場 エンターテインメント アート 農との連携 地産地消レストラン 美食・食文化 まちづくりカフェ 多様な文化 国際化 リノベーション 伝統はつ

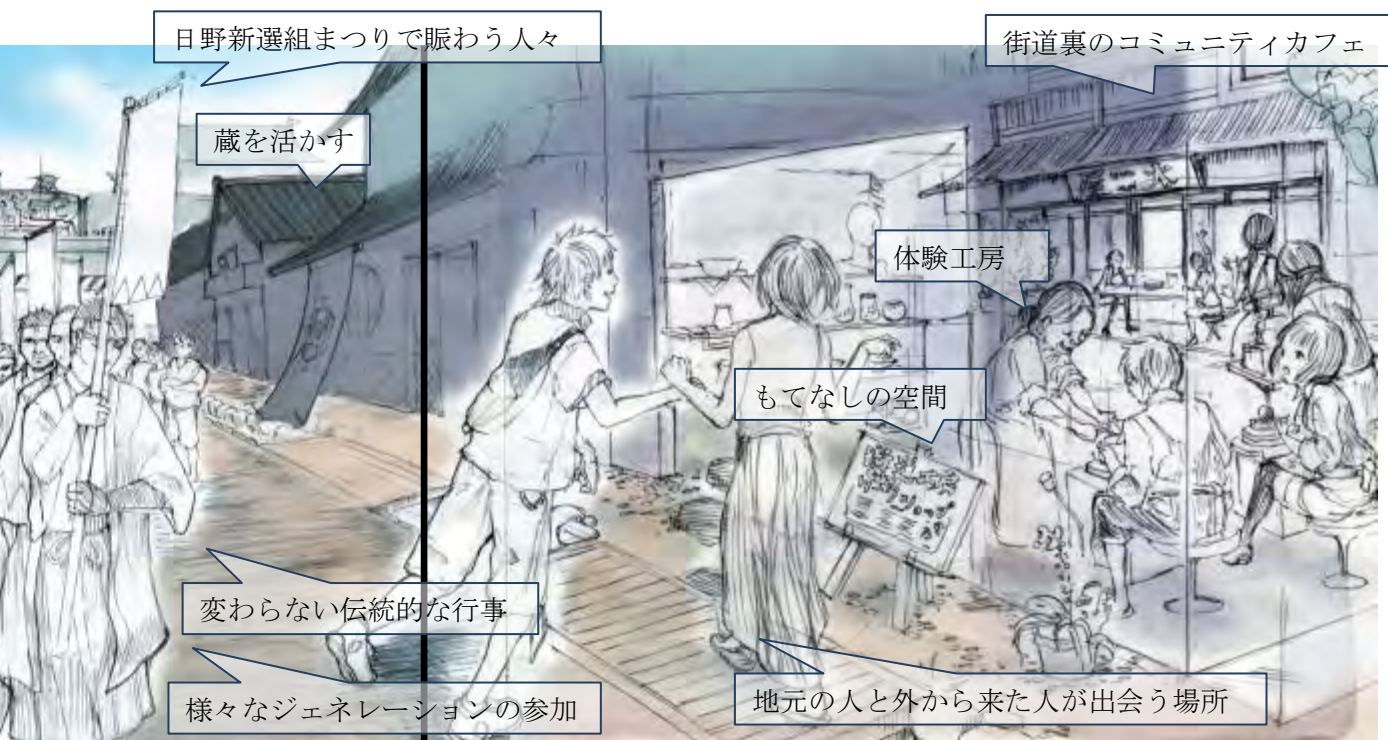


図.28

くる シェア 女性パワー 楽しく活動できる場 ほっとできる場 図書館が大事

解説

日野は古来より街道のまちだった。中世、近世の古道が残る。街道の敷地割、街道を挟み流れる用水路はまちを潤し、人々の心を癒している。日野宿は歴史的、文化的、地理的視点から見て日野のアイデンティティーの一つと言っても過言ではない。街道のまち日野宿を3つのシーンから見てみたい。(N)

(左絵) 日野に広がる農地と繋がったマルシェの界隈

概要

- ・農に対するビジネス感覚
- ・しゃれたスローシティ感覚をもつ交流の場、地域に開かれたサロン、農とマチが出会う文化発信の場。コミュニティ・レストラン、コミュニティ・カフェ、アンテナ・ショップ等

解説

“都市農業をベースとした健康づくり産業”の推進で日野産農産物はブランド化し、農家、市民、企業により加工品も数多く生み出された。日野産農産物を販売するマルシェは日野市内外から多くの人が集まる場所となった。日野宿の蔵はリノベーションされ、カフェやレストランとなり、日野産の食材を活用したオリジナルレシピでヘルシーな料理を楽しむ場となっている。そこは地域住民の交流の場でもある。高齢者の働く場でもある。アンテナショップでは日野ブランドの食材や加工品が並び、また日野の情報発信基地となっている。(N)

（中絵）日野の歴史的な中核となる日野宿

概要

- ・様々なイベントが行われる場所へ
- ・歴史的な資産（目に見えないモノも含む。敷地割、本陣、路地、蔵、用水路、旧原宿駅から移築した駅舎）等を活かす
- ・回遊できるアーバンコア
- ・学生、サラリーマンOB、主婦さまさまざまなジェネレーションの参加

解説

甲州街道沿い日野宿には東京に唯一残る本陣がある。日野宿には、昔の地割、路地、水路、蔵や歴史ある社寺も多く残る。日野宿再生計画に基づき街並みも整備され、蔵を活用したカフェやショップなどが点在し、歩いて回れる楽しいまちとなっている。水路には清流が流れ、水辺に触れる場所や輝く水辺近くのカフェでは水の流れと音を楽しみながらゆったりとお茶を飲むことができる。

日野宿といえば“新選組”であろう。“新選組”のスポンサーは本陣の佐藤家である。かつては新選組の志士たちが佐藤家の道場で武道に励んでいた。新選組まつりでは日本全国から“歳三ファン”が訪れる。八坂祭りも日野の中では最も盛大な伝統的祭りとして受け継がれている。

日野宿交流館では日野宿の歴史を学び、ガイドによるまち歩きも行われ、人々が活躍した時代に想いを馳せることができる。

また少し足を延ばせば、仲田の森蚕糸公園がある。かつて養蚕で栄えた日野の歴史を思いおこす場となっている。公園内には桑畑があり、子どもから大人まで養蚕・製糸・織物体験などができる。かつての蚕室の建物はリノベーションされ、体験の場や資料館、カフェになどとして利用されている。（*2）

歴史と伝統が受け継がれながらも人々が集い、交流する中から新たな伝統がつくられ、日野宿界限はいつの時代も活気あふれる場所となっている。（N）

*2.2012年に法政大学エコ地域デザイン研究所と仲田小学校3年生達との「仲田の森・桑ハウスの将来について提案型ワークショップ」を行った。その提案を元に行っている。

（右絵）裏路地のオシャレな雑貨屋さん

概要

- ・高層ビルではなく質・密度の高いサロンのようなコミュニティレストラン、コミュニティカフェ、アンテナショップ等
- ・歴史的な資産（目に見えないモノも含む。敷地割、本陣、路地、蔵、用水路、旧原宿駅から移築した駅舎）等を活かす
- ・名産品を作る
- ・新名所をつくる

- ・こじゃれた〇〇人限定のお店 。オシャレな雑貨屋さん。

解説

日野宿は甲州街道の両脇に本陣や脇本陣、籠屋などが立ち並んでいたが、街道の奥にも路地が多く現在まで受け継がれている。街道に沿った短冊状の敷地割は、各敷地とも街道から垂直に奥へ通り抜けのできる路地があり、この路地を活かしてネットワークがつながったまち並みが整備される。従来の駅前開発のように、高層ビルを建設することによって駅にのみ人が集中するものではなく、駅から宿場町のエリアへと人が流れ、住民と外から来た人が出会う場として宿場町が再生する。

街道の裏の路地には、コミュニティカフェやレストラン、アンテナショップなどの質と密度の高いもてなしの空間となる。そこでは、周辺で採れたものが名産品として売られ、地産地消による〇〇人限定といったお店に人気が集まる。宿場町の所々に新名所や体験型公房もでき、賑わいのあるエリアとして再生する。

また、街道両脇の日野用水上堰と下堰に面した敷地は、ガードレールによって水辺と人が遮断された空間ではなく、親水性が高いものとなる。(I)

〇大地と水の恵み～住み続けられる水の郷、農地を流れる水路沿い



図.29

概要

- ・農業が再び地域の主役に。農家+市民が守る農地と農ある風景。体験農業・市民農園を超えて
- ・50年後、新しい価値を持って守られている農地
- ・農地の近くの地産地消レストラン
- ・スローライフを楽しむ人々
- ・多様な意味・目的を持つ農地と用水路

（農業、環境的価値、気候の安定、生物多様性、景観、福祉、教育、遊び、防災、エネルギー等）

- ・自立性の高い（食料自給率、経済的自立）豊かな地域を支える安定した自然環境
- ・自然の恵みに魅かれて住む人々
- ・農家+市民によるコモンズとして守られる農地・用水路、コミュニティガーデン
- ・オープンガーデン（個人の庭の開放）

キーワード

菜園都市 田園農地 アーバンファーム コミュニティガーデン 農と住の融合 市民が守る農地
農業は成長産業 日野の魅力は水緑・用水・崖線緑 緑・農地をこれ以上減らさない 生ごみで元気野菜のブランド化 楽しく活動できる場体験農園 水・食料自給 地産地消 スローライフ 生活を楽しむ暮らし 半農半X 便利なまちからの転換 多様なコミュニティ 交流の場 ほっとできる場 居場所・居心地 ゆったり ゴミゼロ あたりまえのものが新鮮 生物多様性 女性・高齢者の活躍

解説

2013年、日本の食料自給率は約39%（2010）。国は平成32年に50%の自給率を目標に掲げたが、その後のTPP加盟により、自給率は上がるどころかますます下がっていった。高齢化、後継者不足の日本農業にTPPが追い打ちをかけたのだ。しかし安い海外の農産物の安全性に疑問をもつ人々は多く、若者を中心に農村への新規就農、また都市郊外では自ら空地进行を活用し、仲間と共に野菜づくり、米作りを始める人々が増えた。それらの人々は時間的にゆとりある暮らしや持続可能な暮らし、スローライフに価値を置く人々であった。

日野市では農作業や新鮮な地元農産物を食べることが心身ともに健康に良く、また日野の農業を守ることに繋がるとして“都市農業をベースとした健康づくり産業”が進められ、さらに積極的に空地、遊休地を活用した生ごみリサイクル農園が日野市内の各所に設けられた。

主婦やリタイアしたサラリーマンやそして週末だけでなく、職住近接で市内や自宅で働くサラリーマンも仕事の合間に、農園を訪れ、農作業を手伝い、新鮮な野菜をその場で調理し、皆と語らいながら過ごす。そしてリフレッシュする。高齢者をいつまでも元気にし、医療費の削減にもつながっている。また農園は日野市内の全学校の児童や生徒が農業を学ぶ場、体験の場にもなっている。水路や田んぼは生き物も多様で子どもたちの水遊びの場でもある。もちろん学校給食用農園も確保されている。

生ごみリサイクル農園には隣接し、レストランもあり、いつでもとれたての栄養価の高い新鮮な野菜を使ったメニューが人気となっている。コミュニティレストランとして地域住民の交流の場としてだけ

でなく、市内や近郊のまちや都心からも多くの人が訪れている。

日野産農産物の特徴は、生ごみ堆肥を活用している点が特徴である。化学肥料、農薬も出来るだけ抑え、安心、安全そして元気な野菜を目指している。

この“都市農業をベースとした健康づくり産業”は市民と農家協働や市民による組織、特に女性や高齢者により運営管理され、日野市内各所に地域性のある生ごみリサイクル農園、コミュニティレストランが生まれ、加工品などが販売されている。

また農園を活用した体験プログラム、健康づくりプログラムなども実施されている。(N)

○地域ごとの個性的なコミュニティ ～住宅地を流れる水路沿い



概要

図.30

- ・地域ごとにそれぞれの物語、世代を繋ぐコミュニティ
- ・共有財産としてのシンボル（樹木、文化財、場所）
- ・共有の広場
- ・子供の遊び場
- ・日常的に行われるイベント

キーワード

楽しい・美しいまち しゃれたまち 川・水路を活かす 地域で子育て 三世代で 様々な家族スタイル 多様なコミュニティ 地域づくりはコミュニティ単位 回遊性 ネットワーク 歩ける・座れる 居場所・居心地 生活の質を高める 日野の魅力は用水・緑・崖線緑 ゆったりとしたまち 歩いて気持ちよい住宅街

解説

住宅街を流れる水路周りには居心地のよい場所が設けられ、住民の交流の場、コミュニティー広場となっている。蚤の市やミニコンサートなどちょっとした地域のイベントや子供たちの工作づくりなど屋外活動などが行われている。小さな子どもを遊ばせていても誰かしら面倒を見てくれるので親も安心だ。お昼時には皆がお弁当持参でこの水路沿いに集まる。温暖化で暑い日が続く中、水の流れや木陰で涼を楽しむ人も集まる。どの用水路沿いも遊歩道が設けられ、ポケット広場を繋げている。市民は水路沿いを散策しながら、水路沿いにあるおしゃれなお店を訪ねたり、カフェでくつろいだりしている。(N)

○日野を見渡す丘陵地での生活



図.31

概要

- ・丘陵の新しい交通手段による、日野の新たな楽しみ方。エコツーリズム
- ・より季節の移り変わりを感じることでできる丘陵地
- ・日野を周遊できるような巡回バスが誕生した
- ・AR(Augmented Reality：拡張現実)技術による日野の一望風景に付加されたデジタル情報
- ・(空き家の増えた) 丘陵の住宅群をリーズナブルにシェアするサービス
- ・豊かな環境と観光拠点としての外国人の往来

キーワード

シェア 空き家活用 エコツーリズム アミューズメント 楽しい・美しいまち 緑の保全 自然体験できる場 自然を生かした教育 歩いて気持ちいい住宅地

解説

市内南部にある丘陵地は、高度成長期以降に山を切り崩して団地や宅地の開発が行われ、多くの森林が失われた。50年後は人口減少が進み、次々と建設された団地や住宅群の空き家化が進むことが予測される。これまでのベッドタウンとしてではなく、豊かな自然環境を活かした丘陵地での新しい暮らし方、楽しみ方を求める人々が出てくる。

かつての団地や宅地が再び緑に戻されるエリアも増え、丘陵地に豊かな自然環境が取り戻され、季節の移り変わりを感じることでできる場所となる。この環境を活かしたエコツーリズムが人気となり、それを楽しむ市内の巡回バスが誕生する。バスの車窓からは、AR (Augmented Reality：拡張現実) 技術による日野の一望風景に付加されたデジタル情報がガラス面に表示され、より直観的に理解できる観光案内サービスも始まる。

空き家化が進む住宅群では有効利用して複数人でシェアするサービスが始まる。その中には、豊かな自然環境と観光拠点に惹かれて宿泊する外国人の姿もある。

丘陵地は日野市合併以前の七生村時代、観光化を目指し、ハイキングコースやゴルフ場があった。合併後は動物公園や多摩テック（遊園地）が誘致された。相続で発生する雑木林の市の買い取りも少しずつ進められ、市民のレクリエーションの場、健康づくりや自然観察など様々な活動も行われている。さらに小島善太郎美術館や百草園など丘陵地の歴史や文化が育まれ、また里山、谷戸に残る田畑など丘陵地の暮らしや風景が残され、保全されていく。これらは里山エコミュージアムとして市民の活動や研究の場ともなっている。(I)

○日野の新産業



図.32

概要

- ・自動車、精密機器に続く次世代テクノロジーの創出の場
- ・自宅のような身近な場所で始めるテクノロジー、IT ビジネス
- ・豊かな住宅環境の中で働く
- ・水を活かした次世代テクノロジー
- ・最新技術を使ったスマートな農をつくる
- ・海外から注目されるような新しい組み合わせ

キーワード

内発型産業 中小企業連携 小さくて先端 きらりと光る企業 優れた技術・労働力 起業家精神 クリエイティブインダストリ ものづくり日野 小さくて先端 ものづくり日野 職住近接 川水路を活かすものづくり日野 地域密着

解説

日野はもともと自動車産業や電気産業で栄えたが、工場撤退後、税収の落ち込みへの対応から環境関連分野（グリーン・イノベーション）、健康・福祉関連分野（ライフ・イノベーション）を重点分野とし、産官学金連携による取り組みを推進した。もともと中小企業も多く、世界的に活躍する企業も少な

くなかったことから、大企業撤退後も、環境関連、健康・福祉関連の新たな技術開発による製品が生み出され、日野市の雇用、税収を維持し続けた。

環境分野では、省エネ、再生エネルギー関連の技術開発が進み、豊かな水を活用した小水力発電、太陽光やわずかな風を活用した風力、下水処理場のバイオマス発電、地熱など様々な発電技術が進み、エネルギーの自給が進められた。また地域ごとにスマート化も進められ、それぞれが電気を融通し合うことも可能となった。原発が廃止され、国を挙げて再生可能エネルギーへの転換が、地域毎の発電の推進となった。化石燃料による温暖化はかなり進んでしまったが、さらなる深刻な事態を防ぐため、またピークオイルを過ぎたことで、再生可能エネルギーへの転換は当然の選択であった。ゴミ処分場が満杯になったことで、拡大生産者責任が強化され、リユース、リサイクル、生ごみのたい肥化やバイオマス発電技術も進み、ほぼゴミゼロとなった。

健康・福祉分野では、介護ロボットの開発はもちろん、農作業をサポートするロボットも開発され、日野の農業を支えるようになった。健康福祉では農作業や日野産農産物を活用した予防的プログラムが開発され、ヘルスツーリズムとして、市外からも多くの人を訪れている。(N)

○街中のショーウィンドウ路地



図.33

概要

- ・皆が見える産業
- ・路地を見る楽しみ
- ・作る楽しみ。開放された工房・アトリエへ
- ・六次産業に見られる新しい産業

キーワード

ものづくり日野 企業と住民の関係づくり 小さい企業を増やす 6次産業 女性の働く場 小さく
て先端 クリエイティブ 楽しいまち しゃれたまち アート 楽しく歩ける 界限 工房 発信
できる芸術文化 伝統はつくる

解説

自然環境に恵まれ職住近接のできる立地条件に、それを求めて多くの工房やアトリエが市内へ進出がなされることにより、「ものづくりの郷」が誕生する。

工房やアトリエは、路地を歩いている人にもガラス越しに職人の仕事風景が見えるよう設計が工夫され、路地には完成した作品が展示される。ここでは加工・製造に限らず、その場で販売や営業が行われる6次産業の拠点となる。

職人たちは、自分の仕事や作品が外から自由に見られ、逆に歩行者は職人たちの作業風景を目にすることによって作る楽しみに接することができる。みんなが見える産業の風景は、新しいビジネスとして発展をみせる。(I)

○日野の祭り、日野の活気



图.34

概要

- ・ みんなが集まる時、みんなが集まる場所
- ・ 変わる行いと変わらないスピリット
- ・ 近現代の背景と伝統的な渡御が組み合わさる不思議な風景

- ・それぞれ異なる地域の人同士が交わる機会、コミュニティが見える機会
- ・子供からお年寄りまで、日野中が盛り上がる
- ・いつのまにか参加者

キーワード

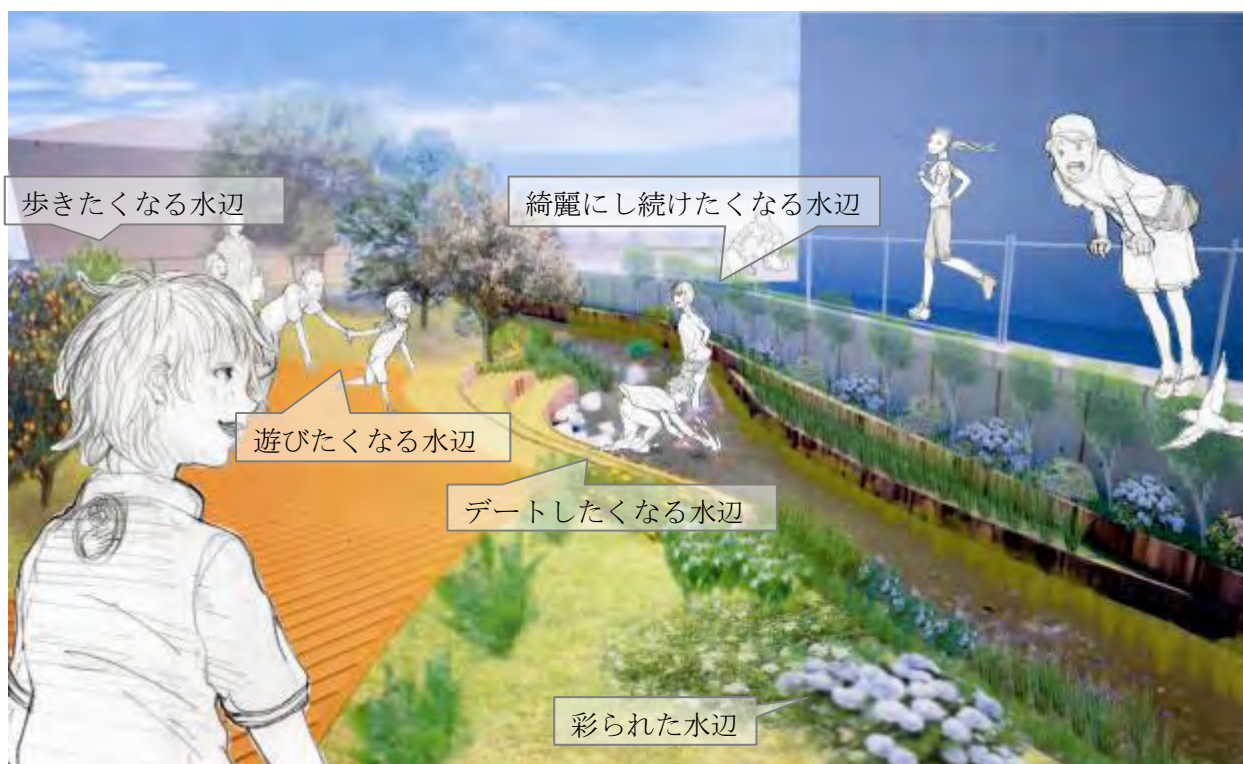
新選組 文化の伝承 世代間交流のイベント 地域の文化 日野らしさ 横のつながり 新旧の繋がり 粋なまち 楽しいまちは人を呼び活性化する 3世代 世代間交流 まちのブランドイメージ 若者にとって魅力あるまち

解説

9月はやっぱり秋祭りの季節。八坂神社はじめ、日野のあちらこちらからお囃子、太鼓、鐘の音、そして人々の掛け声が聞こえ始めるとは人々はそわそわし始める。日野宿通り、住宅街、水田の広がる中を神輿は練り歩く。商売繁盛、豊作祈願、家内安全と人々の願いはいつの時代も変わらない。街並みは変わっても願をかける神社や祭りは不変だ。親から子へそして孫へ、あるいは新たな住民を巻き込み祭りは続いていく。

祭りも多様化した。農村だった頃の行事もいくつか復活して長い。どんど焼きやまゆ玉祭りなどである。アートや音楽、環境や市民活動をテーマとしたフェアも時代を経て継続している。いつの時代も人々を繋げ、地域を繋いできた。地域コミュニティの活性化や防災のためなど、災害が起こるたびに祭りや地域のイベントは見直されて来た。子供から年寄りまで、男も女もこの日ばかりは皆、祭りを盛り上げ、楽しんでいる。(N)

○水と緑を繋ぐ、水辺を彩る植栽



概要

- ・身近で人の集まる水辺へ
- ・多様な意味・目的を持つ用水路
- ・遊び、環境教育
- ・環境的価値（生物多様性、景観気候の安定）等
- ・大人にとっても価値がある
- ・スローライフの舞台

キーワード

清流と緑の保全 川・水路を活かす 用水路・緑の質を高める 水路沿いを育てていく 回遊性 ネットワーク 子どもがのびのびと 子供が未来をつくる 自然を生かした教育 自然体験できる場 外遊びの楽しさ 歩いてきもちいいまち 楽しく歩けるまち 次世代にいい環境をつなぐ 花で用水路を繋ぐ うねった水路 界限

解説

水は日野のアイデンティティである。時に命を脅かすこともある水ではあるが、人は長い年月、命の糧である水と共生してきた。湧水のあるところに人は住みつき、地形を読み込み、水路を開削し、田畑への水の供給や生活用水に活用してきた。都市化とともに、田畑は激減し、用水の存在意義が脅かされた時期もあったが、“水都日野”として水を活かすこと農を活かすことが、市全体で共有された。市民により再生される田畑もあり、用水に対してもその意義を訴え続けてきた先人に対し、評価の声は高い。

日野の水辺の特徴はその多様さである。川、湧水、用水が流れ、様々な水辺の風景をつくっている。区画整理でかつて農村風景だったころの水辺は大きく変わってしまったが、市民がより水辺に親しみ、生き物に優しい水辺へと変わった場所も多い。一番望ましい水のあり方は、清らかな水が滞ることなく淀むことなく流れ、命あるものを育み人々の心を潤すことである。再生された田畑を流れる用水は、生き物に優しく、まさに“春の小川”である。街中を流れる時は、人工的な流れになりやすいが、街並みと調和した水辺景観をつくっている。水辺は季節ごとの花で彩られ、水音を聞きながらの散歩を楽しむ。夜には仄かな明かりで水路沿いが照らされ、都市的なまちの魅力を高めている。夏には明かりを消し、ホテルを鑑賞する場も市内あちこちに増えた。また水辺沿いには歴史・文化施設も点在する。歩きながらそれらの場所ごとを訪ねるのも良い。場所ごとに季節感あふれる水辺沿いの歴史や文化をつないだまち歩きや散歩は、心身を健やかにし、高齢者だけでなく皆を元気にしてくれる。

学校や児童館では用水の流れを利用し、安心して水辺で遊び、生き物を観察できるようにしている。かつての子供たちもそうだったようにまずは用水で水辺に親しみ、川へと行動範囲を広げていく。川での遊びや魚捕りは子どもたちにとっては冒険の第一歩である。自然との遊びを通し、命を育む川や用水を体で理解し、生きる力を育み、自然を大切にすることを育てる。

多様な恩恵を与える水路であるが、そのための維持管理は長年の課題であった。水利権を持つ用水組合は農家の減少と共に多くが解散した。今は市民と行政がともに維持管理している。地域ごとにかつての“結い”の精神で堀浚いや草刈りが行われ、それは地域の繋がりを育む場となっている。(N)

図版出典

- ・図 1～5、19、25、28、29、31、32、34 | 氏家健太郎 作成
- ・図 6 | 永瀬克己、氏家健太郎による共同制作、彩色は永瀬克己
- ・図 7 | 林泰寛（法政大学大学院デザイン工学部博士後期課程、永瀬研究室所属）作成
- ・図 8～11、14、15 | 法政大学エコ地域デザイン研究所編『水の郷日野 農ある風景とその継承』

2010 年、鹿島出版会

- ・図 12、13 | 日野市「日野市環境白書 2011 年度版」
 - ・図 16～18、20 | 国土地理院撮影の空中写真
 - ・図 21～24,27 | 日野市「日野市工業振興基本構想」、2012 年
 - ・図 26、30、33 | 永瀬克己 作成
 - ・図 35 | 浅井義泰（法政大学エコ地域デザイン研究所 兼任研究員）の図面を元に林泰寛作成
- 上記以外はすべて執筆者による作成、撮影。

Hino Vison50 日野曼荼羅メンバー

陣内 秀信 （法政大学エコ地域デザイン研究所 所長）

永瀬 克己 （法政大学エコ地域デザイン研究所 兼担研究員、2013 年 12 月逝去）

岡本 哲志 （法政大学エコ地域デザイン研究所 兼担研究員）

宮下 清栄 （同上）

長谷部 俊治（同上）

高橋 賢一 （法政大学エコ地域デザイン研究所 兼任研究員）

神谷 博 （同上）

長野 浩子 （同上）

石渡 雄士 （同上）

氏家 健太郎 （法政大学陣内研究室 OB、現在デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム株式会社勤務）

あとがき

平成 25 年 12 月の日野市議会にて一人の議員が「日野 50 年ビジョン日野曼荼羅」の実現について質問され、大坪新市長は次のように応えた。「日野曼荼羅」は具体的事業・計画ではなく、指針である。計画や事業は市民の幸せや夢の実現にあるが、そういう視点が欠けがちになる。市政を進める中で、夢や幸せを語ってくれる「日野曼荼羅」に立ち返り考えることがこれを活かすことでもあると。議員はさらにこのビジョンが 1992 年に市民により作成された「市民版マスタープラン」に共通する内容が多く、ぜひ実現させてほしいと語った。「市民版マスタープラン」づくりは市民の画期的活動であったが、残念ながら当時の行政はこの「市民版マスタープラン」を活かそうとはしなかった。さらにさかのぼり 1980 年に日野市が作成した「浅川利用計画」の浅川親水構想にも共通するビジョンをみることができる。その構想は「段丘－浅川－丘陵を結んだ緑の系、水の系と歴史的、文化的要素を結んだネットワークが、景観的に日野の郷土風景の生成に関わるとともに、浅川水系システムの保全や、市民の廻遊的レクリエーション等に役立つ」というものであった。十数年ごとに同じようなビジョンが市民や行政により描かれて来たということである。今回のビジョンは、市民、事業者、行政、学識経験者、大学により作成された。限定された参加ではあったが、このビジョンに市民の変わらぬ願いがあるとすれば、本来は達成すべきビジョンなのかもしれないし、できなかった課題をさらに真剣に議論すべきなのだろう。

“水”が日野のアイデンティティーであり、水を守っていかなければいけないということは言われて続けていることである。しかしながら“水”との関わりは希薄になっている。二つの河川に挟まれた広大な沖積低地には用水、湧水、そして雨水など目に見える“みずみち”もあるが、目には見えないものもある。その上に暮らしがあるのである。エコ地域デザイン研究所が日野に関わるきっかけをつくってくださった、今は病床にある浅川勉強会の山本由美子さんの口癖は“水循環が大事”だった。河川、用水などは目に見える循環だが見えない循環も血管と同じく重要である。だが見えないだけにおろそかになりやすい。今は水田が減り、生活用水も無く、使用される井戸も減ってしまったが、この「50 年ビジョン」は水との関わり的一端を示している。まずは“水”との関わりを見つめ直していくことが「水都日野」の実現にも近づくのだといえる。緑や農にしてもそうである。何らかの関わりが生まれることで関係性ができ、さらにその過程で地域のつながりも生まれる。夢物語と言われるこの「50 年ビジョン」も夢ではなくなるだろう。ぜひこのビジョンをきっかけにまちの将来について、そこにはどんな暮らしがあったらいいか語り合って欲しい。

「はじめに」で紹介したように、今回の報告書に掲載されている「日野 50 年ビジョン」の具体的画はエコ地域デザイン研究所研究員で建築学科教授永瀬克己氏と陣内研究室 OB の氏家健太郎氏が作成しました。そのお一人の永瀬氏が昨年 12 月 30 日に急逝されました。「日野曼荼羅」というコンセプトを提案されたのも永瀬氏でありました。

この「50 年ビジョン」に引き続き、日野市からの依頼で「水辺のある風景日野 50 選」のまとめの作業を開始した矢先でした。永瀬氏にもフォーラムや市民との会議に何度かご参加頂き、最後までご指導頂く予定でした。未だに信じがたい思いで残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。

法政大学エコ地域デザイン研究所

兼任研究員 長野浩子

Hino Vision50

水都日野を目指して

2014 年 1 月 31 日

著者 | 長野浩子、石渡雄士

発行 | 法政大学エコ地域デザイン研究所

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

Tel 03-3264-9517

e-mail eco-history@k.hosei.ac.jp

印刷 | 藤原印刷株式会社